放課後クラブ―初恋プロローグ―

木下さつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
放課後クラブ―初恋プロローグ―

【Ｎコード】
Ｎ９８３２Ｅ

【作者名】
木下さつき

【あらすじ】
放課後の教室で、いつも一人だった文香は、最初は敬遠していた他クラスの少年斎藤と一緒に過ごすようになる。友人たちや斎藤とのやり取りをきっかけに、人と深く関わることを避けてきた少女が、徐々に周囲と心を通わせ、成長していく様を描く。恋に前向きになれなかった文香が、悩みつつも歩き出す、高校１年１学期のお話。

第1話　出会いの季節

４月、公園のほぼ散ってしまった桜を横目に、文香は新しい制服に身を包み、足早に今日から通う自分の高校を目指して歩いていた。

はじめての登校、といっても、それまで通っていた中学から数キロ離れているだけで、しかも中学よりその数キロ分自宅から近い。

―うっかり中学まで行っちゃったりして・・・

文香は、ぼんやりと新しい環境への緊張を意識しながら、自分が犯しそうな失敗が一瞬頭をよぎり

―さすがにそれはないでしょ

と心の中で苦笑しながら自分にツッコミをいれた。

周りにはクールで落ち着いた大人しい少女だと思われているが、何かに集中するとすぐに他がおろそかになり、とんでもない失敗をすることが多々ある。

ついつい過去の失敗に思考が及び、自己嫌悪になりそうになるが、どうにかその思考を遮断し、今日からの高校生活をちらっと考える。

すると今度は緊張感にとらわれそうになり、

―いかんいかん、今から緊張しても疲れるだけじゃん

とまた無理やりその思考も断ち切った。

―こういうときは、何か楽しいのんきなことを考えなくちゃ

早足のまま周囲のうららかな景色に目を向ける。
—あ〜、春だね〜。ぽかぽかあったかいし。菜の花は咲いてるし。空の色もなんだか穏やかだよ〜。
とりあえず、嫌なことには蓋をして、すこし浮き立つ気分を感じながら先を急ぐ。
高校に近づいてくると、同じ制服、同じ色のネクタイの生徒たちの数が増してくる。
文香には知らない顔ばかりだが、自分が遅刻したり日にちを間違えたりしていないことに、ホッとしながら、その制服の列に静かに加わった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

入学式の今日は1年生だけが登校し、体育館にクラスごとに整列することになっている。
クラス分けの表は事前説明会の際に配布され、文香はすでに自分が7組だということを知っていた。
合格発表後、高校からはたっぷりと宿題が出され、事前にその宿題の内容から出題されるテストが行われていた。
そのテストの結果で組み分けされ、成績上位者は特進クラス1〜3組に分けられている。
文香の中学の友人はみな特進クラスだ。
高校入試が終わりぼんやりと日々を送っていた文香はうっかり波に乗り遅れ、宿題は提出前日にむりやり終わらせテストは散々な結果

だった。
同じクラスには同じ中学出身の生徒は一人だけ。ただし、男子。そしてそれまで名前も知らない男子だ。

そのことに少し不安を感じつつも、まったくの新しい環境に少しわくわくするような気持ちがしていた。
中学までは人見知りが過ぎて、すすんで友人を作ってこなかった文香だが、高校ではちょっと頑張ってみようと考えていた。
なにしろまだ高校生活は始まったばかり、最初の波には乗り遅れたけど、まだまだ挽回のチャンスはゴロゴロ転がっている。
―仲良くなれそうな子に気軽に声をかけてみれば大丈夫
自分を励ましつつ、すでに集まりだした生徒たちの群れに足を踏み入れた。

周りを見渡すと、同じ出身中学の者同士なのか、結構にぎやかに騒いでいるが、自分と同じように不安そうな顔で佇んでいる生徒もちらほら見える。
文香は7組の列までたどりつくと、とりあえず近くておしゃべりをしている二人の女生徒に話しかけてみる。

「ねえ。ここって7組の列だよね？」
「・・・うん」
「そう、ありがと」

にこやかに話しかけてみたのだが、向こうにはその気はなかったようだ。ちょっと冷淡に返事をされ、文香の笑顔も薄くなる。
―・・・がんばれワタシ・・・
ちょっとへこんだが、時間になったのか入学式が始まる雰囲気になり、館内のざわつきも徐々におさまってくる。
式が始まってしまえば、あとはただ立って先生の話を聞いているだ

けだ。自分だけ取り残されているような、身の置き場に困るようなことはない。
―まだまだ、これからじゃん。
文香は気を取り直し、わくわくした気持ちを持ち直した。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ねえ！なかやん、部活何にする？」
にこやかに朱音が話しかけてくる。
最初の不安は杞憂に終わり、入学式以後の文香の努力は空回りしていたが、なんだかわからないうちに、無事に仲良しグループらしきものの一員に文香は加わっていた。
中学までは「ふみちゃん」と呼ばれていた文香だが、高校は一味ちがう。「中山文香」の頭をとり「なかやん」と呼ばれている。

話しかけてきた朱音に笑顔を返す。

「う～ん、吹奏楽部に入るかも？朱音は？」
聞き返すと朱音はきっぱり「私はバスケ部！」と答え、
「みんなはどうするの？」と今度は一緒に話していた面々に尋ねる。
みな中学の部活をそのまま継続するつもりだったようで、よどみなくそれぞれの希望を口にする。
朱音がバスケ部、恭子が美術部、沙代子がテニス部、晴美が男子バレー部のマネージャー。
野々山恭子、高木沙代子、野村朱音、瀬下晴美。これが文香の新しくできたツレだ。
クールで落ち着いている恭子、やさしくて女の子らしい沙代子、元

気で天真爛漫な朱音、お洒落で好奇心旺盛な晴美。
性格も容姿もばらばらなこの友人たちは、最初のオリエンテーション合宿のルームメイトだ。
2泊3日の合宿中にすっかり打ち解けて、以後なにかとつるんでいる。

放課後、教科書やノートをカバンに詰め込みながら、文香はまだ迷っていた。
―う～ん、部活、どうしよっかなあ・・
朱音には吹奏楽部と中学と同じ部活に入るようなことを言ってしまったが、実は帰宅部という線が捨てきれずにいた。
中学時代の、まじめでおとなし目の女子ばかりが集うという、吹奏楽部の雰囲気があまり好きではなかったからだ。
―それに、私って微妙にリズム感がおかしいような気がするんだよね・・・
と適正にも疑問が残る。
何より、「一緒に入ろう？」と友人に誘われて入っただけの部活だったので音楽への興味も情熱もイマイチだった。
高校ではがんばるっ！と意気込んでいたが、流されるままに吹奏楽部に入部するのは何かが違うように感じる。
しかし、運動神経がいいわけでも、絵が上手なわけでも、他に得意なことがあるわけでもない文香は部活に興味が持てない。
―もう友達もできちゃったことだし、友達目的で部活がんばる必要もないしな・・・よしっ決めたっ！帰宅部に決定。一人読書部ってことでいいや
活字中毒気味に読書好きな文香は、「一人読書部」などと若干さみしい響きのある部活を勝手に作り、満足げな表情で立ち上がった。
それに気づいた恭子が声をかけてくる。

「あれ？なかやん、もう帰るの？」
「うん。ののは？」
「私は美術部見学してくることにした」
「そっか、まあがんばってね。じゃあ、また明日。バイバイ」
「おう、サンキュ！バイバイ」

他の友人にも声をかけながら、教室を後にし、クラスのある2階から3階へと階段を登っていく。
1年は10クラスあり、1組から5組が3階、6組から10組が2階となっている。
文香が3階へ向かったのは、2組の木下優子を迎えに行くためだ。

同じ中学出身の優子とは、中学では顔見知り程度の付き合いだったが、自宅が近く、歩く速度が文香と一緒だったことから、自然と登下校するようになっていた。
文香は昔から歩く速度が速く、しかも他人のペースに合わせるのがあまり好きではないので、この歩く速度が一緒の優子はなかなか得難い存在だ。
2組の入り口にたどりつくと、優子の姿を探してキョロキョロと見渡す。

「優ちゃん、終わった～？帰れる？」

優子の姿を見つけ、そばまで行き声をかける。

「あっふみちゃん。ごめん、仕度するからちょっと待っててね」

友人とおしゃべりしていた優子があわててカバンを取り出す。

優子を待ちながら、文香は近くにいた同中出身の谷内亜紀と目が合う。

「谷内さん。部活、もう入部届けだした？」

「うん。ふみちゃんは？」

たぶん聞かれるだろうと思っていた文香は用意していた返事を返す。

「私は高校では部活には入らないことにしたんだ」

亜紀は少し驚いた顔をしてから残念そうに顔をしかめた。

「えっそうなんだ。残念」

中学では同じ吹奏楽部の同じパートで、結構仲良しだったのだ。

文香は何となく罪悪感を感じながら、「谷内さんは、がんばってね？」と苦笑した。

すると文香の頭上に影がさした。

「あれ～、他のクラスの子？谷内さんの友達？」

見ると、ぱっちりとした二重の目とぶつかる。

―うわっ、顔ちかっ！

内心びっくりしながら、後ずさり、相手を見返す。

長身で細身の男子生徒が、身をかがめ文香の顔を覗き込んでから、さらに文香と亜紀の顔を交互に見ている。

「斎藤君・・・」亜紀も驚いたのか絶句している。

「ちょっと、斎藤ってば、いきなり会話に割り込んで！シツレーな奴！」

優子の声がが後ろから飛んだ。

「なんだよ、木下。いいじゃんかよ。別に」

優子の非難にも動じず、斎藤は平気な顔だ。

「ふみちゃん、こんなヤツ、シカトしといていいからね！
さ、おまたせ、帰ろ？」

促されて、文香は亜紀に「じゃあ」と手を振りその場を離れる。
ちらっと、「斎藤」と呼ばれた男子生徒を見ると、
「ふみちゃん、バイバーイ」とへらへら笑いながら手を振っている。
どう返してよいものか迷いながらも、曖昧に笑顔を返し、文香は2組の教室を後にした。
―高校にはあんなちゃらい男子もいるんだ・・・
中学では男女があまり仲よくしているとすぐに冷やかされたため、よそよそしい扱いしか受けたことのない文香は、新生物を発見したような驚きを感じていた。

高校生にもなると、色気づいたクラスメイトもちらほら出没し、グループで仲良くはしゃいでいる男女の姿を目にすることもあった。
しかし、文香の高校デビューの野望はあくまでも「楽しい高校生活」であり、色恋沙汰への野望は一切考えていなかった。
相手の言葉や行動に一気一憂する恋する乙女たちをみるにつけ、
―メンドクサ～
といまいち共感できないでいる文香は、異性を意識はしているが、どちらかというと警戒していると言ったほうが近く、メンドウゴト

に巻き込まれたくないと、ドライに考えている。
「斎藤」の名も、知らず知らず危険因子として、文香のなかではインプットされた。

第2話　友達の恋

高校生活も1か月が経過すると、クラスメイトの顔と名前も大体覚え、それぞれの位置づけがわかってくる。
文香のグループはのんびりとしていて朗らかだけど、それほど目立たない女子のグループ、と位置付けられている。
それでも、最近文香はクラスではそれなりに注目を集める生徒になりつつある。
というのも、5月に行った中間テストが思いのほか良かったのだ。
高校に入ってから、文香はそれなりに宿題もするし、予習もちゃんとするようになった。
テスト前には、一夜漬けではあるが、徹夜でテスト勉強をした。
すると面白いように結果に反映し、学年では５０位以内、クラスでは1位の成績をおさめることができたのだ。
成績はすべて職員室前の廊下に貼り出されるので、一躍文香の株は上がった。
―私って、やればできる子だったのね
自分でもびっくりだったが、やれば結果につながることが、さらに文香のテンションを上げていく。

実は中学までの文香は宿題もテスト勉強もほとんどしたことがなく、高校受験前に初めて勉強に手を出したほどのなまけ者だったのだ。
テスト直前に必死にみんながノートを見直しているのをしり目に、小説を読みふけっていて、「余裕だな中山」と隣の席の男子に嫌味を言われる程、テストに頓着していなかった。
宿題は毎回先生に呼び出されて、居残りでやらされていたが・・・
それでも、中の下クラスの成績を維持していたのは、授業は集中して聞いていたことと、それなりに記憶力がよかったお陰であろう。

勉強重視のこの高校では、赤点を取れば指導室に呼び出しを受け、補習と追試が待っている。反対に成績さえよければ、多少態度が悪くても、教師はあまり干渉してこないのだ。

入学直後のテストで失敗した文香はこれ以上出遅れないために、それなりに勉強することに決めている。

おかげで中間テスト後は、補習を受けている晴美の勉強をみてやったり、ノートを見せてあげているうちに、さらに文香株は上昇。

たいして話したことのなかったクラスメイトも「なかやん、これ教えて」と頼ってくれる。

入学式のときに冷たい反応を返された女生徒とも、今では普通に会話することができる。

——私ってば絶好調じゃん

まさに有頂天だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・

そんな楽しい高校生活を送っていた文香だったが、最近気になることがあった。

仲良しの晴美や沙代子に好きな人ができ、まさかと思っていた朱音にも片思いの相手がいるのだ。

救いは恭子にそんな気配が一向にないことだ。

休み時間になると、それぞれキャーキャーと好きな相手の話で浮かれている。

文香には名前だけで顔も知らない男子ばかりなので、相槌だけで、いまいち会話に乗り切れない。

恭子も文香と同じ境遇なのに、恭子はその涼しげな一重で切れ長の目を興味深げに細めて、晴美たちの話を飄々と聞いている。

文香は正直、別に好きな人がほしいとは思わないが、なんだか取り残されたような気がしていた。

それでも沙代子が
「ねえ、なかやんは好きな人、いないの？」と目をくりっとさせながら、興味のなさげな文香に話を振る。
「いないよ。だいたいみんなどこでそんなの見つけてくるのさ？」
文香はちょっと拗ねながら、みんなの顔をうかがう。

「なかやんは男子に警戒しすぎなの。それ以上近づくなオーラがでてるよ。なんか男子に対してやたら厳しいし」
恭子が文香を指さしながら、指摘する。
―ののだって好きな子の話しないクセに・・・
しかし、そこをつっこんで恭子に「好きな人がいる」と言われたらちょっとショックかもしれない。

「だって、人見知りなんだもん。それに男子ってばくだらないことばっかしてて、なんかウザいじゃん」
「ほら、やっぱ男子に厳しい～」

クスッと恭子が笑う。さらに晴美が追い打ちをかける。

「それに部活も入らないし、クラスでは女子に囲まれてるしじゃ、男子と接点ゼロ？」
「でもさ、2組の斎藤君だっけ？なんかやたらとなかやんに絡んできてない？」

朱音が目を輝かせながら、声をひそめて聞いてくる。

「はあっ？斎藤って誰それ？あ～もういいってば、別に好きな人がほしいわけじゃないんだから」

会話の流れがやばい感じになってきたのを感じてさえぎる。

そして晴美のきれいに整えられた爪を見ながら「そういえば、晴美が好きな橘君ってどんな子？」と最近一番熱を上げている晴美に話を振る。
とたんに沙代子と、朱音が騒ぐ。

「「橘君かっこいいよね～」」

突然話を振られて焦った晴美は「好きになっても、みんなにはあげないからね？私が先に好きになったんだから！」などと、とんちんかんな受け答えをした。
恭子の意味深な視線は感じたが、他の三人の意識は晴美に移ったようだ。

ほっとしながら、朱音に聞かれた「斎藤」のことを思い出す。
２組に優子を迎えに行ったときに遭遇した斎藤とは、たまに出くわすことがあった。

帰宅部のはずの文香だが、優子が新体操部に入り、下校時間が遅くなってもまだ一緒に下校していた。
家に帰っても予習をして本を読むくらいで特にやることのない文香だが、あまり早く帰ると夕飯の支度から、犬の散歩、掃除、洗濯と、母に家事を押し付けられるのだ。
そのため、自習をしているという名目で、優子の部活が終わるまで教室で待っていた。
勉強さえしているポーズをとれば、教師も何も言ってこない。
それに家までは歩いて３０分くらいだが、その途中は人家や街灯のとだえる道もあり、たまに痴漢がでるのだ。
優子と一緒に帰れるのなら、多少教室で時間を持て余していても苦にならない。
部活が終わるまでの、２時間を、読書や勉強、時にはグランドをぼ

んやり見ながら、ゆっくりと過ごしていた。

その日も、文香は優子の部活が終わるのを待ちつつ、自分の席で宿題を終え、予習をしていた。

—よし、英語の予習はここまでやっとけば大丈夫でしょ

と教科書とノートをしまい、代わりに読みかけの文庫本を取り出す。文香は本を読みだすと、時間を忘れて読みふけってしまうので、携帯電話のアラームをセットしてから、読み始める。

しばらく読書に集中していると、急に前の席の椅子が引かれ、誰かが後ろ向きに座り込む。

—うおっと！いつの間に教室に入ってきたんだ？

文香はびくっとしながら、顔を向けると、斎藤だ。

「何やってるの？中山さん。暗くない？」

読書をしているのは明白なのに聞いてくる。言われてみれば室内は少し薄暗くなっている。

ちょっとびびりながらも「木下さんを待ちながら、読書してたの」と文香がなんとか答えると。

「ふ～ん？」といいながら。斎藤は身を乗り出して文香の目を覗き込んでくる。

—何？こいつ？　と訝しく思いながらも、斎藤の目にからかうような色があることにカチンときて、文香も逃げずに

「なによ？」と目を眇めて攻撃的な光線を発する。

それでも斎藤はお構いなしだ。そのまま無邪気な笑顔でさらに距離を縮めてくる。

「中山さんって、顔小さいね。俺の半分くらいしかないんじゃない？」

―ほんとに何なんだこいつは・・・

「そっかな？まあ男女の体格差を考えれば、君より顔が小さいのは当然かもね。そんなにひょろ長いのに顔がちっさかったらバランス悪いじゃん」

適当な言葉でお茶を濁そうとする文香を、まじまじとおもしろいものを見るような目つきで斎藤が見つめてくる。

「中山さんって、こんなに顔近づけても恥ずかしくないの？」

―・・・そう思うなら、そんなに近づいてくるんじゃねぇ・・・内心途方に暮れたが、この男のからかいに乗ってやるものかと、無理やり平常心を保ち、「別に～なんとも思わないけど～」と苦笑いで返してやった。

その後「ふ～ん」とおもしろくなさそうにつぶやき、ようやく顔を元の位置に戻した斎藤は「じゃあね」とまたへらへら笑いながら去って行った。

―今のはいったいなんだったんだ？？？

と文香は斎藤の後姿を見送りながら途方に暮れた。

以降文香の中では、単なる「チャラ男」から「斎藤」＝「未知の生物」＝「アンタッチャブルな存在」として位置づけ直された。

その後も文香を見かけるたびに斎藤はからかうように声をかけてくる。文香が毎回冷たい視線で応えているにも関わらずだ。

客観的に見れば、斎藤はかっこいい、たぶん。背は高く、やせすぎの感はあるもののバランスのとれた体型をしている。顔立ちもアイドル系で色白だが愛嬌のある感じだ。

ちょっと制服を着崩し、身を屈めるようにポケットに手を突っ込んでだらだら歩く様子は、やんちゃ坊主を彷彿させる。

女の子に気軽に声をかけるから、それなりに人気もあるのかもしれない。
だけど文香にとっては、意味不明の言動で文香を惑わす、平和な日常を脅かそうとする危険因子にすぎない。
―あいつはいろんな女子に愛想を振りまく「ナンパ野郎」に違いない
そう結論づけ、文香は斎藤の言動に心を閉ざすことを決めた。
だから、斎藤の言動に思考を巡らすなんてことは、絶対、したくないのだ。

一瞬斎藤のことを考えかけて、気がそれた文香を置き去りにて、晴美たちはまだ「橘君」について、盛り上がっていた。
―どうやら、「橘君」とやらは女子に人気があるようだな・・・
完全に自分への追及から話がそれたことに満足し、文香も会話に加わる。
「そんなに、かっこいいなら、私も見学したいな～」と晴美をからかうために心にもないことを言う。
恭子にはあきれたような顔で黙殺されたが、晴美は「だからあ、なかやんにもあげないって」と想像通りの反応を返してくる。
「え～、見るくらいいいじゃん。だいたい別にまだ晴美のモノじゃないんでしょう？わが国は自由恋愛なんだからね」
と人の悪い笑みを浮かべてさらに追い討ちをかける文香に、「なかやん、他人事だと思ってからかってるでしょ？」とさすがに晴美も文香が橘に興味がないことに気づき、冷めた目で見返してくる。
「ごめんごめん、じゃあカレシになったら、紹介してね？」
悪ノリしたことに反省して謝ると、晴美は意外にテンションを下げて「そだね、そんなことがあったらね・・・」と少し悲しそうな顔をしている。
沙代子も「橘君、人気あるから、激戦区だよね」と遠い眼をしている。

沙代子は別に橘のことが好きなわけじゃないはずだから、晴美に同情しているのだろう。
「橘君って、成績はいいし、スポーツもできるし、背も高いし、顔も性格も爽やかだし、人気があるの分かるな。2年の先輩のチェックも入ってるらしいじゃん」
その場の空気に気づかない朱音は能天気な明るい声でさらに追い討ちをかける。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

—はあ〜、晴美に悪いことしちゃったかな
予鈴のチャイムにさえぎられ、晴美の見込みのなさそうな片思いの話は打ち切られたが、意外に本気だった晴美をからかってしまったことをちょっと反省する。
—でも、しゃべったこともない相手を好きになるってどういうことなんだろう？
文香はそんな憧れに近いような恋にいまいち納得がいかず、それで晴美も大して本気ではないだろうとタカをくくっていたのである。
第一、晴美のなかばあきらめている様子が腑に落ちない。
晴美は黒目がちな大きなぱっちりとした瞳が印象的な美人だ。背が低いと本人は気にしているが、それも文香から見ればかわいらしく、男なら庇護欲を誘われるだろうことは想像に難くない。その上誰とでも気さくに話す晴美は、好きな人に積極的にアプローチするタイプ。その晴美が高嶺の花と思うなんて、よっぽどだれもが憧れる王子様ってやつなのだろう。
その日の午後、美術の授業中、文香は恭子と連れだって中庭にスケッチにいく。
この時間は選択科目で美術、書道、音楽のうち好きな科目を選んで履修する。

朱音、沙代子、晴美は音楽、文香と恭子は美術を選択している。

スケッチブックを片手にぶらぶら歩きながら、

「あんま、恋する乙女を刺激するとイタイことになるよ？」と恭子がニヤリとして午前中のやり取りを蒸し返してくる。

「だって、そんな素晴らしい男ならご尊顔を拝したいと思うじゃない。純粋な好奇心よ」

文香も冗談めかして応じる。

「大して興味もないくせして。その場限りの好奇心ってやつ？晴美は今、恋を中心に動いてるんだから、ぬるい視線で見守ってあげなよ」

とそれも友人としてどうなんだと思うようなことを恭子は平然と言い放つ。

「何よ？ぬるい視線って。のもの案外冷たいねえ。まあ、私もちょっと悪ノリしたことは反省したから、今後は気をつけるよ」

文香がそう話を打ち切ると、ちょうど中庭に到着し、それぞれ思い思いの場所を陣取りスケッチを始める。

恭子は美術部だけあって、すでにスケッチに集中しているようだ。いつもよりさらに無表情な顔つきで、目線だけが、スケッチブックと中庭の風景とを、行ったり来たり上下している。

文香も下手の横好きではあるが、写生は結構好きな方だ。

絵に集中しながらも、静かな時間の流れに心地よさを感じる。

考えてみると、恭子とは一緒にいても沈黙が苦にならない。自然体で付き合える間柄だ。

そう考えると、朱音や沙代子、晴美には少し無理をして、合わせている部分がある。

でも、それでも、その時間は文香にとって楽しいものであるし、不満はない。

―いろんな付き合い方ってものがあるんだよね
そう文香は納得している。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

午後の授業が終わり、掃除の時間になると、晴美が「なかやん、ちょっと相談があるんだけど・・・」と声をかけてくる。
「ん？何？」と聞くと、「ちょっと、ちょっと、こっち」と教室の隅へ文香を引っ張っていく。

「何？内緒話なの？」
「そうじゃないけど、ちょっとなかやんに相談」
二人でカーテンの陰に潜みながら、こそこそと話をする。
「実はさ。橘君のことでちょっと悩んでるんだ。」と晴美が切り出す。

文香が目線だけで促すと

「他のクラスに幼馴染の友達がいるんだけど・・・その子も橘君が好きなんだって相談されちゃって。
　協力してほしいって頼まれてるの。で、困っちゃって・・・」と困り顔で文香を見上げてくる。

どうしたものかと文香も考えつつ、「それで、晴美はどうしたいの？」と尋ねる。

「どうしたいっていうか、友達とは仲良くしたいんだけど、橘君とのことは協力したくないし、かといって先に打ち明けられちゃって、

私も・・なんて言いにくいし・・・」

どうやら、ほんとにどうしていいやら決めあぐねているようだ。しかし、橘君はみんなの憧れの的で高嶺の花だし、おそらくその幼馴染も晴美も片思いのまま終わる公算が大きいだろう。だとすれば、お互いに気持ちを打ち明けあって、きたるべき失恋を慰めあうのがいいのではないか、そう文香は思ったが、「どうせ失恋するんだから」なんてことは晴美には口が裂けてもいってはならない。

「う～ん・・でもさ、ウソついて協力してもたぶんその友達とぎくしゃくしちゃうと思うよ？だからちゃんと晴美の気持ちを打ち明けて、お互い頑張ろうって話に持っていくのがいいよ。それで喧嘩になっちゃうんなら仕方ない。橘君のこと本気で好きなら迷うことないと思うよ」と言葉を選びながら話す。

「・・・そうだよね。ちょっと緊張するけど友達に打ち明けてみる」

晴美は顔をこわばらせながら、決意を込めて宣言した。その表情を見て、晴美が橘のことを友達に言うべきだと思ってはいたが、すこし勇気が足りなくて文香に背中を押してもらいたくて相談してきたんだ、と納得する。

「そうだよ。好きになっちゃったものはしょうがないんだから、友達だからって遠慮するのは間違ってるって」

さらに晴美を勇気づけようと、少し大きな声で励まし、ばっと二人で潜んでいたカーテンを翻し話を終わらせた。近くにいた男子にびっくりしたような顔でまじまじと見られてしまったが、晴美と顔を合わせてほほ笑みあう。

「うっし！」とガッツポーズを二人でキメ、教室の掃除に取り掛か

った。

第3話　出会いと遭遇

ホームルームが終わり、クラスメイト達が教室を出ていくのを見送ると、文香はさて宿題でもやろうかなとプリントを取り出す。
しかし、なんだか今日は気分が乗らない。
そこに、恭子がガラガラと後ろの扉を開けて入ってくる。
「あれ？忘れ物？」と声をかけると
「うん、忘れ物」と恭子は肩をすくめて見せる。
そして、ふと思い出したように

「そーいえば、掃除の時間、晴美とこそこそ何やってたの。カーテンの陰に隠れちゃってさ、さてはなんかエロいことでもしてたんでしょ？」

とニヤリと横目で文香を見ながら、とんでもない言いがかりをつけてくる。

「うげっ、何言っちゃってるの？清純乙女にひどいこと言わないでよ」

わざとらしくぱちぱちと瞬きをしながら文香も馬鹿げた返事を返す。

「のの様のご進言の通り、非常にまじめに晴美の恋愛相談を受けてたの」
「はあ～？晴美も相談する相手間違えてるよ。清純乙女に聞いてたら悩みも深くなるばかりでしょ」

ぷぷっと噴き出しながら失礼なことを言い放つ恭子に、文香はめげずに胸を張って応戦する。

「なによお、こうみえても知識だけは無駄に蓄えてるんだから、恋愛相談くらいどんっと来いってもんよ」
「あ～あんた、本ばっか読んでるもんね。まあそれがどのくらい役に立つかは大いに疑問だけど？それにしても晴美は勉強教えてもらってるからって、なかやんに頼るのが癖になってるんじゃない？なかやんも知ったかぶりしてないで、わからないことはわからないときっぱり言った方がイイよ？」

恭子はあくまでも文香への恋愛相談を否定する構えだ。
内心ちょっと傷つきながらも、恭子の言うこともっともかと思い、
「だね。私が恋バナなんてキャラ違うって感じだよ」と両手を軽くあげお手上げポーズを取った。
「そーゆーこと！じゃね」と恭子もそれ以上話を続けず、美術室へと戻って行った。

晴美に言ったことがなんだか嘘っぽかったかもと考え出すと、ますます宿題をやる気分じゃなくなり、気分転換に校内をうろつくことにした。
まず図書室へと足を向け、覗き込むと席はすべて3年生で埋まっている。
そういえば、放課後の図書室は、大学受験を控えた3年生に占拠されているというのが、この高校の常識だったと思い出しながら、昇降口に向かう。
一度覗いてみたいとおもっていた場所を思い出し、スリッパからローファーに履きかえ、校舎の裏へ向かう。
―確かこっちだと思ったんだけどな
きょろきょろしながら記憶を頼りに向かうと、塀で区切られた一角に小さな建物が見えてきた。
―あっ、たぶんあれだ

文香はその建物に近づいていく。
中は覗けないかもと思いつつも近づくと、幸い戸が開いていて中が見えそうだ。
付近に誰もいないことを確認して覗き込むと
「バヒュッ」と音が聞こえる。
そこは弓道場。中学には弓道場なんてものがなかったので、一度見てみたかったのだ。
弓道部が練習をしているんだろうなと思ったが、意外に人気がない。どうやら、現在弓を引いている人が一人いるだけのようだ。
そのことにほっとして、さらに中に入り込む。
―おじゃましまーす。まあいいよね。学費を払ってるんだから、私にも弓道場に入り込むくらいの権利があるもん
心の中では強気なことを考えながらも、弓を引いている人に見つからないようにこそこそと靴を脱ぎ上がり込む。
靴を靴箱の隅に隠すのも忘れなかった。
壁際から覗き込むと、弓を引いている人の横顔が見える。
背が高く、肩幅のある男子だ。髪は短く、眉毛がきりっとしている。
袴姿がなかなか凛々しい。
一心に的に向けて意識を集中しているようだ。
―しめしめ、この分ならおとなしくしてればばれずに済みそうだなどと不法侵入者はほくそ笑む。
その男子生徒は静かに集中力を高めているのか、視線を下げ動かない。
その様子になんだか文香まで緊張してくる。
―なんかこの人、武士？みたい・・・
文香によってとりあえず「武士」と命名された彼はようやく矢をつがえる動作に入る。
ゆっくり弓を引き絞っていう様子に、文香の緊張はさらに高まる。
風を切る音がして、矢が的の端をかすめる。

知らないうちに息を止めていた文香は、ほうっと息を吐き出した。
するとその気配に気づいたのか武士が振り返る。
見つかる！と焦るが、とっさに逃げることも隠れることもできず、文香は固まってしまった。

文香を見とがめた武士は弓を下ろして、びっくりしたような顔で見ている。
そして、ふうっと息を吐き出し文香に近づいてくる。
「どうしたの？今ごろ入部希望者？」と困ったような顔で尋ねてきた。
返事に詰まりながらも
「ちっ違いますっ。すみません。弓道場ってどんなところなのか興味があって・・・」とごにょごにょ答える。
そして先ほどから疑問に思っていたことを口にする。
「あっあのっ、弓道部の方ですよね？他の部員の方はいないんですか？」
仮にも凶器となるものを扱うのだ、顧問もいないなんておかしい、と思ったのだ。
「いや、部員は他にもいるけど、今日は自主練なんだ。人がいると集中できないから・・感覚がつかめるまで、空いているときに使わせてもらってる」
武士が普通に現代人の言葉でしゃべってるよ、とつまらないことを考えながら、文香は落ち着きを取り戻す。
「そうなんですか。え～とお邪魔しました。失礼します」
不法侵入者はそそくさとその場を立ち去ろうとした。
「あっ、ちょっと」と思いがけず呼び止められ、文香は肩をびくっとさせて振り返る。
武士の顔を伺い、表情で「なんですか？」と尋ねる。
「俺も一年生だから」という武士の言葉に文香は首をかしげる。
「さっきから、あんた敬語だろ？同じ一年生だから必要ない」

とぶっきらぼうに告げる様子に
―なんだかこのヒト、ほんとに武士っぽいよ
と根拠のないことを考え、くすっと文香に笑いがこぼれる。
「あ～そうなんだ？なんか結構さまになってるから上級生かと思っちゃった。邪魔しちゃってごめんね。これで退散するから続けて？」
なんで笑われたのか分からないというように、怪訝な顔をしながらも武士は
「別に構わない。本当は人の気配で集中できないほうが問題なんだ・・・まぁ気にするな」と言ってくれた。
―お～このヒト心意気も武士だね。ちょっと神経が繊細みたいだけど・・・
「繊細」と「武士」の言葉がアンバランスで、その対比の絶妙さに口角が自然と持ち上がる。
文香は改めて武士の顔を観察し、
「うん、ありがと。じゃあ、失礼します」と弓道場を後にした。
―う～ん、なかなか爽やかな武士だったなあ
きりっと太めの眉と一重で男らしい目、少し太いがまっすぐな鼻梁とひきしめられた口元が印象的だった。
遠くから見た印象に違わず、武士は近くで見ても武士らしいイメージを崩さなかった。
袴姿の印象が強すぎて、制服やジャージを着た姿が想像できないほどだ。
―むしろ着流しにちょんまげが似合いそう、いやいやがっしりとした肩幅に背筋のぴんと張ったあの凛々しい立ち姿は、紋付き袴の方が似合うかも「若殿」って感じだね
その想像に顔がにやけてしまいそうだ。
「若殿」との出会いに気を良くした文香は足取りも軽く、教室へと戻っていった。

うきうきと教室に戻ると、教壇の脇に置かれた花瓶に目が行く。
白いデージーとミントが活けられているが、ミントの葉が少しうなだれている。
水でも代えてやるかと、花瓶を手にして再び教室を出る。
誰にも秘密だが、この花は実は文香が持ってきたものだ。
ガーデニングが趣味の母は、文香が小学生の頃から頻繁に文香に学校へ持っていくよう花を押し付ける。
小学生の頃は平気だったが、中学に入ってからは、その行為がいい子ちゃんぶってるような感じがしてなんだか気恥ずかしく、誰も来ない朝一に登校してこっそり花を飾っていた。
母の行為は文香にとっては非常に迷惑だったが、非難する理由はまったくない行為であるし、確かに教室に花があるのはいいことのように思えたから、文香は仕方なく花を受け取り、高校に入ってからも教室と女子トイレの花瓶に花を飾るのが習慣になっている。
「これでよし」と教壇に水を入れ替えた花瓶を戻す。
こんな些細なことを気にする自分が馬鹿みたいだとは思うが、どうしようもない。花を見つめながらそう割り切って、先ほど放置した宿題をやってしまおうと席へ向かう。
「あっ、ふみちゃんハッケーン」
背中から聞こえた声に振り返ると、案の定「未知の生物アンタッチャブル斎藤」が笑顔で近づいてくる。
「どこ行ってたの？待ちくたびれたよ」
そのセリフは軽く無視して自分の席を見ると、机の上に変なものがある。

―紙ひこーき？・・・

「ちょっと、これアンタ？人のプリントで、何をしでかしてくれちゃってるのよ？」

宿題から姿を変えた紙飛行機をつまみながら、不機嫌に斎藤を振り返る。
それを見て、斎藤は「あっ」と思い出したようにつぶやき、
「ちょっとふみちゃん待ってたら暇になっちゃってさあ。宿題なんて飛んでちゃえばいいのにって思ったら、つい・・」
悪気なく、てへっと頭をかいている。
―飛んでっちゃってるのは、間違いなくアンタの頭でしょうが。
ああこいつの頭には羽が生えてる・・・。ふっ、私ってポエマー・・・
あまりのことに、最初の怒りも忘れ力が抜ける。
斎藤の呑気な顔を見てから、がっくり肩を落とした文香にニヒルな笑いが浮かぶ。
「・・・。ふ～ん、そっかー。まあ、やっちゃったものは仕方ないよね」ははっと力なく笑って席に着く。
―ああ、こいつの行動は完全に私の理解の範疇を超えている。この男の言動の意味を私が考えようが考えまいが、関係ない。どうせ考えたところでわかりっこない。そうだこいつは宇宙人ってやつなんだ。
そう考え、若干気が楽になった文香は宇宙人に気楽に話しかける。
「それで、うちゅっ（じゃなくて）斎藤君は何か用だったの？」
―宇宙との交信だね　と心の中で突っ込むことも忘れない。
「うん、なんか久々にふみちゃんと遊ぼうかと思ってね」
いつもと違いまともに相手をする文香をうかがうように、それでも

にっこりと斎藤が言う。

「ワタシ宇宙語ワカリマセーン」と返したいところだが、それを言ったら文香の方が非常識な人間になってしまう。

「そうなんだ？でも今日はあまり時間がないから、付き合えないなあ。ごめんね」とあくまでも如才なく文香は答える。

斎藤はますますいつもと違うぞといった感じに小首を傾げ、「ふみちゃん、今日は素直だね。何かあった？」と聞いてくる。

「何かって、ありありだよ。何せ宇宙人に遭遇してるんだもん」と言いたいところだが、「ううん。何もないよ。別に普段と変わんないって」とごまかす。

本当は先ほどから「ふみちゃん」と呼ばれていることにツッコミたくてしょうがないが、その気持も抑え込み、へへっと笑う。

「なんか、つまんないの。まあ、いっか。んじゃ、宿題がんばってね」と去っていく。

「うん、斎藤君も気をつけて」と手を振ると、斎藤はありえない言葉を聞いたように、ガバッと振り返り、眉をひそめ「ああ、さいなら～」と首をかしげながら帰って行った。

その様子に、心の中で

―・・・勝った、私は宇宙人を凌駕した・・・

と謎の勝利宣言を発表し、ニヤリと笑う。

とりあえず紙飛行機を宿題のプリントに戻し、両手でしわを伸ばすと機嫌よくとりかかった。

—宇宙人もチョロイもんね♪

第４話　用意された平和

宇宙人との遭遇から、文香の高校生活はいつになく恙なく進んでいく。
今日も今日とて、お昼休みにお弁当を食べながら友人たちとの会話に花を咲かせている。
それに最近、晴美はあまり橘の話題を出さなくなり、晴美が言わないから気を使ってか、沙代子も朱音もあまり自身の恋の行方について話題に乗せることが少なくなった。
話題は、ドラマや音楽の話に部活の話、社会科の教師の悪口、迫りつつある文化祭、そのあとに続く期末テストへの恐怖などの当たり障りのないものばかりだ。

そんな中、晴美が思い出したように話題を変える。
「そういえば、最近なかやんってば、斎藤君に優しくない？何かあったの？」
「あー、宇宙人？宇宙の平和を守るため友好関係を築くことにしたのよ」
「「「「・・・はあ？」」」」
―あっ、めずらし！４人が揃った。ののまで同じ反応とはね
不思議なものを見るように絶句した４人の友人の顔を、文香は面白そうに眺める。
頭の中で文香の発言をリフレインしているようだ。いくらリフレインしても、どんな意味か分からないと察したのか、最初に失語症から復活した恭子が心配そうに聞いてくる。
「何言ってんの？なかやん。気は確か？」
「大丈夫だって、ちょっとしたオチャメだよ。ほら、斎藤君って言動が訳わかんないじゃん？この間あまりにもおかしなこと言ってるから、気づいたのよ。

ああ、考えても無駄だなって。このヒトはたぶん私の理解が到底およばない宇宙人だって、違うホシの人なんだから親切にしなきゃってね。
　ほら聖書も言ってるでしょ「汝の隣人を敬え」ってね」
へらへら笑う文香の顔を4人がまじまじと見つめてくる。
はあっ、とため息をつき、最初に自分のペースを取り戻したのも、やはり恭子だった。
「まあ、いいけどね。訳の分からないものに名前を付けて、思考的逃避行動に出たわけね」
あきれ顔でつぶやく。
それを聞き文香は内心
　―あちゃ～、嫌なこと言うな～
と思いながらも「ふんっ、何とでも言いやがれ。私の平和万歳、よ」とうそぶく。
さらに混迷が深まった顔をした、残りの3人も、文香よろしく、訳の分からないことには蓋をすることにしたのか、笑顔を貼り付け「まあ、平和って、いいことよね」と頷きあう。

平和なランチタイムを取り戻した5人は、当たり障りのない文化祭の話題に戻っていく。
文化祭といっても、曲がりなりにも進学校のこの高校では大したことはしない。しかも大学受験と時期を離すために6月の半ばに行われるのだ。
平日に近くの老人ホームのお年寄りや幼稚園の園児を招き、出し物や出店をするくらいだ。
休日に催して他校生徒とトラブルになったり、父母のクレームに右往左往したり、なんてことが起こりえないよう、先回りした平和が準備されている、そんな文化祭である。
とは言っても、準備のために買い出しに行ったり、授業のスケジュールが変更になったり、いつもより遅くまで教室で作業をしたり、

とささやかなる非日常の予感に、生徒たちは浮き足立つ。
文香のクラスでは園児たちが楽しめるように、教室内に迷路を作って探検してもらおうと企画している。
危なくないように生徒が園児に付き添って、一緒に迷路内を探検するのだ。
迷路はジャングルのような装飾を施し、園児が好むであろう動物の絵をちりばめる予定だ。

「のの、美術部員の腕の見せ所だよ」
沙代子が楽しそうに期待を込めた目で恭子を見る。
「やめてよ沙代ちゃん。私の描く絵見たことある？シュルレアリスムなキリンを園児が理解できるかしら」
ニヤリと恭子は不敵に笑う。恭子も文香と同様、素直にがんばるといえないタイプなのだ。
「園児に理解できなくてもいいから、私見たいかも」朱音が無責任な発言をする。「私も～」それに晴美までそこに乗る。
「朱音も、晴美も、やめなって。冗談じゃなく、やっちゃう女だよ。ののは」
珍しく文香は悪ノリせず、恭子を牽制する。

先に「やっちゃう女」と言ってしまえば、恭子は恐らく変なことはしないだろう。行動をみすかされるのが嫌いなのだ。
まさかやらないだろうと思われていればやるし、たぶんやるだろうと思われていればやめる、アマノジャクな奴だ。
ここで調子に乗って「やれるもんなら、やってみな」とでもいえば、恭子は間違いなくやらかすだろう。
―おとなしくポップなキリンでも描きやがれ
内心毒づきながら恭子を窺うと、「まさか、私はそこまで非常識じゃないって、子どもとお年寄りには優しい常識人だからね」と期待

通りの反応だ。
文香はこみ上げる笑いを噛み潰しながら、「いいよね。特技がある人は、私なんて役立たずの無駄飯喰らいだよ」と必要以上に自分を卑下する発言をする。
しかし、やはりこれはやりすぎだったのか、恭子にジロッと睨まれ、肩をすくめた。
でもその発言を真に受けた沙代子に「そんなことないよ、なかやん。買い出しとか段ボール集めとかやること満載なんだから」と言われ、「そうそう、たまにはあんたも集団行動に従いなさい」と集団行動から外れっぱなしの恭子にしたり顔で諭される。
恋のハンター晴美は「何か起こりそうな予感がする」とわくわくしてるし、朱音はただただ授業がつぶれるのがうれしいのか「早く文化祭の準備がしたい！」と浮かれている。
普段ならノリが悪く、こうした行事に積極的には参加しない文香も、友人たちの様子につられてか、少しだけ気分が高揚している自分を自覚していた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そんな平和な日常の中、放課後の宇宙との交信は続いていた。
文香が教室で一人でいると、たいてい斎藤がやってきて、声をかけてくる。
冷静に観察すると、斎藤は人懐っこいだけで、人畜無害な男だと文香は思う。
―私が意識しすぎてたってわけだ。なんかこっぱずかしと当初の自分の過剰反応を恥じる気持も湧いてくる。
会話はたいていのどかな話題だ。女友達となんら変わらないような話で盛り上がる。
最近では斎藤が、宇宙人ではなく、人懐っこい大型犬に見えるほど、

文香の斎藤に対するガードは下がっていた。
楽しそうにおしゃべりをしている斎藤は、笑顔の後ろにぶんぶんとよく回る尻尾が見えそうなほど無邪気だ。
文香は何度も頭をヨシヨシとなでたり、「お手っ！」と言いそうになる自分を抑えなくてはならなかった。
すでに心の中では「宇宙人」ではなく「ポチ公」と呼んでいるし、たまには自宅で作ったお菓子で餌付けもする。
斎藤は部活に入っていないようだが、すぐには家に帰りたくないのか、いつも乗る電車の時間まで文香のところで時間を潰して去っていく。
宿題をやりながら適当に相手をする文香に文句を言いながらも、他に暇つぶしのネタがないのか、毎日のように訪ねてきた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

文化祭の準備週間を次週に控えた木曜日。
文香は優子に英語の辞書を借りようと3階へと向かう。
階段を上り切り、１組の前を通り過ぎようとすると、横から「あっ」というつぶやきが聞こえた。
いつも周りの様子を気にすることもなく、まっしぐらに2組まで突き進む文香だったが、視線を感じてふと足を止めた。
見上げると、やはり背の高い男子生徒がこちらを見ている。
―なんだか見覚えのある顔？知り合いだっけ？・・・あっそうか、「若殿」だこのヒト。服装違うからわかんなかったよ。っていうか意外に制服も似合うじゃん。別人みたいだけど・・・
ちょっと固まってしまったが、気を取り直して話しかける。
「ああ、弓道部の人だったよね。先日はお邪魔しました」とぺこりと頭を下げる。

すると「いえいえ、大したお構いもしませんで」とあちらも頭を下げている。
―おお〜さすが「若殿」、礼儀もわきまえてますな。ちょっとその返事は面白いけど
と思っていると、若殿が頭をあげて、ニヤッと笑っていた。
それでふざけてやっているんだということに気づき、文香も笑いをこぼす。
「それじゃ」とお互い軽く手をあげて別れ、文香も2組の教室へ向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・

その日の放課後、やっぱりやって来た斎藤といつものように話していると、ふいに斎藤が口を閉ざす。
話の途中だったので気になって顔をあげると、なんだかこちらの様子をうかがっている。
「なに？どうしたの？私の顔になんかついてる？」と頬をなぜながら文香が聞くと、
「いや、何もついてない。・・・う〜ん。ふみちゃんって、橘と知り合い？」と聞き返してくる。
「橘？なんで？名前は聞いたことあるけど、知らないよ」
文香は訳が分からず首をかしげる。
「今日廊下でしゃべってたじゃん」と無表情に言う。
「今日・・・廊下で？」まだピンとこない文香は今度は逆方向に首をかしげる。
「3階の廊下でしゃべってたって聞いたよ？」と斎藤がさらに言ったので、文香はようやく思い至った。
「ああ！あれが橘君なんだ？へえ〜、はぁ〜、なるほどね〜。確かにさわやかかもね〜」と以前に聞いた橘の評判を思い浮かべながら、

納得する。
「って、なんで斎藤君がそんなこと知ってるのよ？しゃべってたってほんの一瞬だよ？」
「な～んか、女子の間で噂になってたからさ。橘って普段あんまり女子と口効かないのに珍しく女子と話してたって」
その斎藤の言葉にぎょっとして、文香の頭に最悪のシナリオが浮かぶ。
―それって、晴美になじられて、私がしどもど言い訳しなくちゃいけないってパターンじゃないの？あるいは、橘ファンクラブに呼び出されて校舎裏でシメられるとか・・・。やだやだ、そんなメンドーに巻き込まれるなんてまっぴらごめんだよ
そんな妄想に顔をしかめ「そんなに噂になってたの？その話ってどこまで広がってる？どこで、だれが、いつ、どんな噂を？」と続けざまに聞いてくる文香を、斎藤は不思議そうに眺めながら、
「2組の女子が、お昼休みに、橘と7組の中山さんが見つめあって仲よさげに話してった、つってたんだけど？どこまで広がってるかはわかんねーよ」と文香の質問に律儀な回答を返してきた。
「！仲良くって？普通に挨拶を交わしただけだよ・・・恐るべし！乙女の恋のフィルター・・・」なんとなく悪意を感じるその内容にさらに文香は混乱する。

―だいたい橘っていったら、晴美も晴美の幼馴染も掘れちゃうようなイケメンで、沙代子や朱音まで声を揃えて「かっこいい」と評するほどのイケスカナイヤツだったはずで、私はそんなヤツとは絶対かかわりあいになりたくないと思っていたのに・・・若殿が橘、橘が若殿・・・詐欺だよ。王子様タイプじゃないじゃん。橘なら橘らしく後光が差してるとか、歯がキラッと輝くとかわかりやすくしてよね！
勝手な橘像を創り上げていた文香には、すっかり「若殿」にだまさ

れたような気までしてくる。
すっかり冷えた気持ちで「まあ、大した噂じゃないし、ほっとけばそのうち消えるよね。橘君と話すことも二度とないだろうし」と頷き自分への慰めを言う。
そんな文香の様子にいつもの調子を取り戻した斎藤は、「ふ～ん、まっ、なんでもねーなら別にいっけど」とポチ公スマイルをよこし、「そーいえばふみちゃんって好きな男いないの？って、その前にカレシとかいたりする？」となんでもないような調子で聞いてくる。
「はぁ～？あんたまでそんなコト？だいたいカレシ持ちが毎日教室で放課後一人さびしく過ごしてるわけないじゃん」

そこまで話し、私ってもしかしてさびしい女？とちらっと考えてから、それよりも重要なことに気づく。
「そういえば、あんたはまさか彼女とかいないでしょうね？実は女子に人気とか？・・・それこそ変な厄介事に巻き込まれちゃうじゃん。大丈夫でしょうねえ？！」と疑わしそうな顔で斎藤を窺う。
「なんだよ～、いまさら。俺はふみちゃん一筋だから心配するなって！」と見当はずれの返事をする。
「いやいや、そこはどうでもいいから。なに？ヒトスジって、サブイ・・・」ジロリと横目で睨むと、「サブイってひでー」斎藤はげらげら笑いながら洩らす。
「だって、よくよく考えてみると、斎藤君と私のこの状況の方が、その恋のプリズムフィルターで、二人っきりでラブラブだったとか、つきあってるとか、あれこれ色付けて変な噂になりかねないじゃん・・・」
そこまで言うと文香は考えるのも恐ろしいと、ぞっとした顔をする。
すると斎藤は少し意地悪な目をちらりと寄こし、「っていうか、その心配は手遅れだから気にすんな」ポンっと文香の肩を叩く。
「！手遅れって、まさか、まさかだよね？」文香は不安げな表情で斎藤の顔を見上げる。

「まさかって、もしかして今まで何も知らなかった？とっくに噂になって、付き合ってるんだってことで沈静化してるけど？」ポチ公スマイルのまま文香に爆弾を落とす。
文香はあまりのことに頭の中が真っ白になって、はたっと机に突っ伏した。
―あーこのまま寝てしまおう。これは夢だ。夢に違いない・・・
得意の現実逃避だ。

斎藤は突然突っ伏してそのまま動かなくなった文香の前で、どうしたものかなと、文香を見下ろす。う～んと首をひねり、おもむろに文香の長い髪の間から覗いている白うなじに手を伸ばし、指でツーっとなぞる。
「うひゃあ！なにすんの！イヤー！今ぞわってしたよ。ぞわっと」
首を縮めながら両腕を抱きしめるようにさすり、すごい剣幕で文香が復活する。
「いや～、急にふみちゃんのスイッチが切れちゃったみたいだから、再起動しようかと」斎藤は悪気のなさそうな顔でこめかみを人差し指でポリポリと掻いている。
「で？なんでそんなに噂になるのが嫌なの？なんか困ることでも？」と片眉をくいっと上げて文香の目を覗き込む。

器用に動く眉をちょっと羨ましく見つめながら、改めて冷静に今後この噂がどんな影響を自分の生活に与えるか、について考えを巡らせる。
「なんで嫌かって、みんなのさらしものになるのが腹立たしいんだけど。事実無根の噂の渦中に放り込まれるのも納得いかないし・・・でも別に困らないかな？今まで何もなかったし、すでに沈静化してるならどうしようもないし・・・」
釈然としないながらも、すでに何もなす術はない、と結論付けた。
最終的には、なるようになれ、とかなり投げやりな気分になってい

た。

―そうだ、それよりもだ。ポチ公のことよりも、橘君の方が問題だよ。晴美の耳に入る前に対処しておく必要があるな

おもむろに鞄から携帯を取り出す。

晴美にメールを打とうとして、どう説明してよいか困り、手が止まる。いきなり「橘とは挨拶しただけでなんでもない」なんて、それまで橘のことを見たこともないといっていた文香からメールしたら、わけわかんないし、白々しい。だいだいこの話を晴美が知っているかどうかもわからない。明日にでも直接説明した方がいいか、と思い直し携帯を閉じる。

文香のこの一連の行動を見守っていた斎藤が、しまおうとした携帯を文香の手ごとつかむ。

「何やってんの？」

びっくりして斎藤を見上げると、ちょっと怒ったような顔でまっすぐにこちらを見つめる視線とぶつかり、文香は固まる。

固まった文香を見て、斎藤はふっと表情をゆるめて、クスリと笑う。

「ね、キスしよっか？」

急に瞳に甘い色を滲ませてそう囁くと、ぐいっと文香の手を引き寄せる。ぶつかるっと思って目を閉じた文香は、やわらかく受け止められる。斎藤の熱が肩に添えられた手から伝わってきた。

―あ、体温高い、ポチ公

と斎藤が言った言葉の意味を理解しないまま目を開くと、身をかがめた斎藤の顔が近づいてくる。とっさによけようとするが、肩にあった熱が首筋に移動し引き寄せる。ふわっと柑橘系の香りを感じ、その後唇に冷たくて柔らかい感触を感じる。

「んっ！？」
―・・・体温高いのに、冷たい、それに・・・柔らかい・・・
最初冷たかった斎藤の唇は徐々に文香の温度と同化し、さらに深く混ざろうと角度を変えて強くひき寄せられる。そこで我に返った文香は唇を引き締め、自分の状況を理解しようと、目だけをきょろきょろさせる。斎藤とキスをしていることは、理解したが、どうしたものかと動揺する。斎藤の様子を窺うと、薄目を開けて長いまつげの陰からせつなげな視線を投げてくる。
―ぎゃあっ！なに？そのエロエロビームは！こいつ欲情しやがったな、発情期か？ポチ公！
その視線に絡みとられそうになりながらも、なんとか意識を立て直し自由になる左手で、斎藤の右耳をむんずとつかんで引っぺがす。
「イテテテテっ、何すんだよ！」斎藤は耳を押さえ机の上で悶えている。
「そっそれはこっちのセリフだよ！いきなり発情しないでよね！」動揺を隠しながら、びしっと指さす。
―伏せっ！伏せてろ！ステイ！
そんな文香の心の声を無視して、斎藤は耳を押さえながらも顔を上げる。
「イッテ―な。耳もげたらどうすんだよー」
「あー、悪いことしたワンコには、すぐさまお仕置き？ってのをするのがしつけのポイントなんだよ？」
斎藤の唇が文香のグロスで光っていることに動揺しつつも、目をそらし、平静を装い冗談でごまかす。
「ワンコにお仕置きって・・・はぁ～、ふみちゃん、君はナカナカテゴワイね・・・」
そう言って組んだ両腕をそのまま机の上に投げ出し、そこに顎を乗せて文香を見上げてくる。
「で？・・・どんなだった？嫌だった？それともヨカッタ？」
とまたエロい目線を投げかけてくる。文香は思わず携帯を握りしめ

たままの右手を無表情に振り下ろす・・・が斎藤は意外に機敏な動作でその手をよけて手首をつかむ。
「あぶね！ふみちゃん意外に過激だねぇ」
余裕の口調だ。
「まだしつけが足りないかと思ってね」
ははは と乾いた笑いが文香の口からもれる。
「まあ、今日のところはこれぐらいにしといてやるよっと」
斎藤はそうつぶやき、不意に立ち上がる。
文香の頭をくしゃっとなでてから「じゃな」と軽く後ろ手でバイバイしながら去って行く。
文香は茫然と斎藤の背中を見送った。
―飼い犬に手を咬まれた・・・

第5話　ガラガラ迷子

翌日、登校した文香は気持ちを切り替えて、別のことを考えようと思ったがうまくいかず、思考停止状態でぼんやりしていると、後ろからど突かれた。
びっくりして見上げると、恭子が眉をひそめて覗き込んでる。

「おーい、入ってますかぁ？どこにトリップしてるんだぁ？」
「いたいなあ」と文香が睨むと、
「アンタが呼んでも返事しないから、とうとう幽体離脱までやらかしてんのかと思って」ニヒヒと笑いながら目は心配そうに文香を眺めている。
「あーごめん。幽体離脱か～それも楽しそうだね～」と力なく笑うと、
「いつもにまして、壊れてるな。ほらほら、もっと生への執着を持ちなよ～」なんて、後ろから首を絞めてくる。
「やめれ～～ほんとにしぬる～」文香もちょっと気がそれてバタバタとふざけてみせる。

ひとしきりじゃれあい、落ち着くと、恭子も隣の席に座り、改めて文香の顔を覗き込む。
「どーした？なんかあったんでしょ？」
「のの～。ありがと。・・・でも、なんでもないのちょっと寝不足・・・」文香はすがるような目で恭子を見て、だが何があったかは話す気になれずに最後にはうなだれる。
「ありゃ～。ほんとになんかあったんだ？ふ～ん。まあ言いたくないならいいよ。相談したくなったら聞くしね？」
恭子は文香のほっぺを人差し指で突っつきながら微笑む。バレバレだったようだ。

「・・・うん。ほんと、ありがと。さっさとやなことは忘れて、文化祭に集中するよ」文香はふやけた微笑みを返した。
「さっさと忘れて、ねぇ～。はぁ。なかやん、そうやってやなことを後回しにしてると、ドカンとまとめて後からたまりたまった厄介事が降ってくるってわかってる？自分のツケは自分で支払うことになるって忘れないようにね」
頬杖をつきながら、横目でメッ、と文香を睨む。
いつもよりワンランク優しい恭子だが、その言葉には思い当たる節がありすぎる。そうか、これは今までのツケなのかもしれないと漠然と考えるが、文香の思考は停滞したまま、気分もふさがったままだ。とりあえず直近の危険を回避しようと、文香は口を開く。

「ねぇ、のの。今日、放課後に美術室行ってもいい？どんな絵描いてるのか見せてよ」
「うん？ま、いいけど。なるほど「ポチ公」氏と何かあったわけだ？」
「ええっ！？いやいや、そこは関係ないから。ただ前にシュルレアリスムとかなんとか言ってたから、興味があるだけ。他意はないよ」
「ほぉ。君にそんな趣味があったとは初耳だ。なかやんは写実的な絵がお好みだったと思ったけど？」
「そう？自分では写実的な絵しか描かないけど、見るのは結構好きなのよ？」
「へぇ～」
「なによ？」
「いやいや、来るのは大歓迎ですよ。邪魔さえしなければ、何時間でもいてくれてオッケーだし？」
「じゃ、じゃあ、放課後一緒に美術室行くから！邪魔はしないのでよろしく」
ふふんと笑う恭子に焦りながらも、とりあえず放課後の避難場所を

確保した文香は少し心に余裕ができた。今日をしのげれば、来週からは文化祭準備だ。教室で一人ということもない。時間がたてばなんとかなるだろう。

その日一日は、斎藤と出会うことのないように細心の注意を払って行動し、なんとか放課後まで乗りきった。
美術室でも、恭子は文香の不審な行動を見逃してくれるつもりらしく何も聞かずに、放っておいてくれた。
おかげでずいぶんと落ち着きを取り戻すことができた。

恭子の絵は、文香にはなんだかよく分からなかったが、なんとなく恭子らしい絵だった。
「へえ、これ文化祭の展示用の絵？」
「そうよ。あっ、なかやん、何も感想言わなくていいから」
「へっ、なんで？」
「完成するまで聞きたくないの。今は人の意見に影響を受けずに、自分が感じたありのままを作品にしたいから」

その言葉に文香は一瞬意外なことを聞いたような気持ちがした。
いつも、誰にも、何にも、揺るがない強い意志を持っているように見える恭子なのに、と。だがよくよく考えてみれば、恭子は周囲をよく見ているし、冷たいようで実は優しい。
表面的には分かりにくいが、それは感受性の高さを示しているように思えた。
「うん、わかった」
なぜだか嬉しくなった文香は、素直にうなずき、沈黙のままその日の放課後を美術室で送った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

月曜日、週末をだらだらと過ごした文香は、重い足取りで誰もいない早朝の教室へと向かう。
カバンを机の脇にひっかけると、持っていた紙袋から、今朝母に手渡された花を取り出した。今日の花はアジサイだ。
バケツと花瓶を手に手洗い場へ向かう。バケツに溜めた水の中で適当な長さに茎を切り落とし、一本ずつ花瓶に挿していく。
―うん、こんなもんでしょ！
それなりにきれいに活けることができたと満足の笑みをもらしてから、バケツにゴミと残りの花を入れ片手に持ち、もう一方の手で花瓶を持って、教室へ戻る。
花瓶とゴミを置き、残った花を持って、今度は女子トイレへ、そこの花も差し替え、再び教室に戻る。
先ほどバケツごと放置しておいたゴミを捨てようとゴミ箱を開けると、先週の掃除当番がサボったのかゴミが満杯のテンコモリだ。
―げげっ。あ～もう、仕方ないなあ・・・
腹を立てながらも、持っていたゴミを詰め込んでから、ゴミの詰まったビニル袋を引っ張り出す。新しい袋をゴミ箱にセットしてから、重たい袋を引きずるようにして集積所へ向かった。
―くっそ～。重い。誰だ？先週の週番は！絶対シメてやる！
むかむかしながら、ドスドスと音が聞こえそうな歩調で集積所に到着し、ゴミの山の上へ「うおりゃ～！」と怒りのままゴミ袋を放り投げる。
ちょっとすっきりして、パンパンと手をはたいていると、「ぶっ」と誰かが噴き出す声が後ろから聞こえた。
恐る恐る振り返ると、そこにはジャージ姿の橘がいた。
―げげっ。何笑ってるの？私？私のこと？今、乙女らしからぬ怒声とか聞かれちゃった？
とたんに頬が熱くなるのを感じたが、特に話しかけられているわけでもないので、無視して教室に戻ろうと踵を返す。

「おいっ」
「・・・」
「おいって！」
「ん？あっ私のことでしょうか？」
呼びかけを無視しようとしたが、無視しきれず白々しいセリフで足を止め振り返る。
―何よ？人を呼びとめて、辱めようってワケ？
「で？何よ？」
「いや何ってわけじゃないけど・・・まあ、あれだ。顔見知りにあったから、朝の挨拶だ。おはよう」
「・・・おはよ」
「なんだ、朝から元気だなと思ったんだけど、そうでもないのか？」
「いや普通に元気ですけど？言っとくけど、さっきのアレは怒りの発露であって、別に私の地ではないからね。空耳だと思って、お忘れください」
「なんだそりゃ？変なヤツ。まあ、かなりおもしろかったけど、気にするな」

けんか腰の文香の様子を気にもせず、橘は愉快そうに笑った。そこに馬鹿にするような色はないことを知り、文香もつられて笑う。
―確かに、客観的に見て、ちょっと変な女だったかも。
「あんた、朝から何やってんだ？部活は？」
「え？部活は入ってないよ。橘君こそ朝錬の最中じゃないの？」
「ああ、朝は体育館で筋トレなんだけど、部室にタオルを取りにな」
「へぇ、そう」
「ああ」
「え～と、それじゃ私はそろそろ教室に戻ろうかな」
「ああ、じゃあな」
「うん、ではでは」

そそくさと教室に戻ろうとする文香に、ふと思い出したように橘が声をかける。

「そういえば、あんた、名前は？」

「えっ？」

「こっちのことは知ってるんだろ？俺はあんたの名前を知らんぞ」

「あ〜、橘君は結構有名だったたらしく、自然と私の耳にも名前が聞こえてきまして・・・」

「で？あんたの名前は？」

「・・・ナカヤマ、中山文香」

「中山、クラスは？」

「・・・7組」

「そうか、じゃあな、中山」

「・・・うん、じゃあね」

橘は少しだけ目もとと口もとに笑顔を滲ませ、颯爽と走っていった。遠ざかっていく、広い背中を見送りつつ、文香は緊張から解放され、はぁっと息を吐き出した。

—橘君はやっぱ「若殿」だな・・・。立派な家庭でまっすぐ育ちましたって感じだよ。ひねくれものの私にはちょっと眩しいよ・・・なんだかちっぽけな自分を哀れに思いつつ、そういえばと晴美に説明をするのを忘れていたことを思い出し、文香はまっすぐに教室を目指して歩きだした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

文化祭週間中は、授業は午前中で終わる。午後がすべて文化祭の準備に充てられるのだ。

昼休みになり、机を適当に寄せて、いつもの5人で弁当を食べ始める。

「ねぇ。晴美」
「ん？なに、なかやん」
「私、橘君がどの人かわかっちゃった」
「え？なに、突然？」
「いや～、名前も知らなかったんだけど、前にちょっと話したことがあった人がいて。最近そいつが橘って人だと知ったんだよね」
「えーっ？なかやん、橘君と話したことあるの？？ズルイ・・・」
「なに？ズルイって」
むくれる晴美をなだめつつ、なんとかなんでもないことを強調しながら、これまでの経緯を話す。今朝、「偶然」会ったことも加え、都合の悪そうな会話はいくつか省略しつつ。
「なにそれ。なかやん、ズルイ。うらやましすぎる。私も橘君と知り合いになりたい・・・」
文香は他の3人に助けを求めるような視線を送る。
「えっと、しょうがないよ、こればっかりは。わざと会いに行ったわけじゃないんだから、なかやんは橘君の顔も知らなかったわけだし」
「沙代ちゃん！私だってそんなこと分かってるよ！それでも腹が立つじゃん！」
「まぁまぁ、え～と。あっそうだ！晴美も弓道場をのぞきに行けばいいじゃん！」
「・・・朱音、あんた私に部活をサボれと？一年生がそんなことできると思うの？」
「仮病とか・・？」
「結構マネージャーって忙しいんだよ？それぞれ仕事が決まってんだから！私がサボれば確実に先輩たちの仕事が増えて迷惑かけるの！」

「・・・スイマセン」
それまで静観していた恭子が、しょうがないなといった感じで軽くため息をついた。
「晴美、視点を変えればこれはチャンスかもよ？」
「え？どういう意味」
「今まで、橘と接触もできてないんでしょ？なかやんが橘とつながりができたってことは、なかやんの友達であるアンタともつながりができたっていうことでしょうが」
「えぇ～」
「つまり、さりげな～く、なかやんを通じて橘に接触を図るのよ。ほら、一緒に廊下を歩いてすれ違うとか？」
「う～ん」
晴美は恭子のその提案について、少し考えているようだ。文香はそんなことできそうもないと焦りながらも、これで晴美が引き下がってくれないかとなんとも言えない面持ちで見守る。

「うん！そうだね。なかやん、そういうわけだからヨロシクね！」
「う、うん、分かった。分かったけど、私と橘なんて2～3回しゃべったことがあるだけで、すっごい細いつながりしかないんだからね？あんまり過度な期待はかけないでね？そこんとこ分かってるよね？ね？」
なんとか収まったらしい晴美の怒りにホッとしつつも、先行きが非常に不安な文香は、情けない顔で友人たちの顔を見回す。
恭子は面白そうに見てるし、沙代子と朱音はホッとした顔で、さらに晴美の期待を煽るようなことを言って励ましている。
自分に味方してくれそうな顔を見つけられず、さらに不安が募る文香だった。
晴美が沙代子と朱音を連れだって、トイレへ席を立つと、文香は恭

子を恨めしそうにジトッと見る。
「なによ、その眼は」
「なんか、のの、面白がってたでしょ？人の窮地に、塩を送るどころかさらに重荷を乗っけてきちゃってさ」
「何言ってるのよ？橘に晴美を紹介するぐらい、顔見知り程度でも、大したことじゃないでしょう？」
「ええ～。そおか～？そりゃ晴美が橘に気があるってばればれでもいいなら、「この子あんたのこと好きみたい。よろしくね」って簡単だけど、違うでしょう？どうすれば不自然じゃないように紹介するのよ？ぜんぜん思いつかないんだけど？橘君との会話なんて、挨拶と社交辞令くらいしか思いつかないよ。だいたい単なる顔見知りレベルだし・・・」
「それならそれで、しょうがないじゃない。努力はしたが、うまくいかなかったってことで、晴美も納得するでしょ？」
「そうかな～。なんか無理難題言ってきそうで、正直怖いんですけど」
「大丈夫だって、3階の廊下を二人で連れ添って行ったり来たりを何度か繰り返せば、晴美も満足するでしょ？」
「はあ」

3階の廊下・・・と考えて、はたと気づく、上のフロアは斎藤を避けるために近づかないようにしていた危険ゾーンではないか。
―そんなことしたらは若殿に会うより先にポチ公に会いかねないじゃん・・・あ・あ・あ・ありえないよ！
このままでは、なぜ3階に行きたくないのか説明を求められかねない、ということに気づき文香はワタワタする。

「あんた何キョドってんの？・・・ああ、ポチ公にまだ会いたくないわけだ」
「は？」　―おまえはエスパーか？？！！

「ばかだね。幸い文化祭なんだから、3階に行かなくても、向こうから会いに来るって！」
バシッと文香の背中をたたきながら、恐ろしいことを告げる。
「・・・お願い、のの様。助けて。ワケを話すから何とか私をポチ公からかくまって！！！」と追い詰められた文香は恭子にすべてを話して、頼るしかないと覚悟を決めた。

文化祭の準備に皆が気を取られている隙をついて、文香と恭子は教室を抜け出し裏庭へ向かう。
そして斎藤との顛末をしどろもどろ説明する。最後まで黙って聞いていた恭子は、話が終わると溜息をついた。

「あんたね、それが自分の自業自得だってことは自覚してるんでしょうね？」
「・・・」
「言っとくけど、ポチ公の行動にはそれほど非はないよ？」
「え～！」
「だいたい、あんなに分かりやすい行動をとってる男を放置したあんたが悪い！」
「・・・」
「ポチ公の行動があんたへの恋愛表現だってことは薄々感ずいてたんでしょ？そりゃ、そうよね。いくら暇だからって、飽きもせずあんたのところに日参してさ。ふみちゃん、ふみちゃんって、気づかない人間がいたらお目にかかりたいね」
「でででででも！すっすきとはいわれてません！」
「あんたがのらりくらりとはぐらかしてたんでしょ、どうせ。それで、ポチ公が爆発しちゃったわけだ？」
「・・・・・・」
「あんたはポチ公が懐いて来た時点で、なんらしかの行動を起こさなきゃならなかったの。追っ払うか、受け入れるか。それを覚悟も

ないまま、流されるように飼いならしてるような気でいるからこうなったんだからね。わかった？」
「・・・・ううう、理解しました」
「分かったならよろしい。で？ここからは、これからの話だけど、あんたポチ公のことどう思ってるの？」
「どうって？ポチ公はポチ公であって、単なる・・・なんだろ？友達とも違うし、今まではよその家のワンコぐらいにしか思ってなかったんだけど・・・」
「で、今は？かわいいワンコじゃないって分かったんでしょ？」
「・・・・わかんない・・・」
「じゃあ、考えな。でもその前に逃げるんじゃなくて斎藤と今の自分の気持ちを話してきなさい」
「わかんないのに？」
「わかんなくても！「斎藤のことどう思ってるか分かんないので、斎藤の気持ちに応えることはできません。ごめんなさい」って言えば、あとは向こうで考えるでしょ」
「でも、告白もされてないし、なんでキスしたか分かんないよ？」
「分かるの！もし斎藤が好きでもないのにあんな行動とったって言うなら、そんなロクデナシノことなんか一切考える必要ないんだから、いいでしょ？」
「う・・・ハイ」
「分かればヨロシイ。んじゃ、戻るよ」

ざっざっと教室に戻る恭子のすらりとした背中に、とぼとぼと文香は付いていく。
―ポチ公が私を好き？・・・私はポチ公のこと、どう思ってるんだろう・・・そりゃかわいいと思ってたし、それなりに愛着わいてたけど・・・恋とはかけ離れてるような？

教室に戻ると、文香と恭子を見つけて朱音が走ってきた。

「二人ともどこ行ってたの？ほらののさんはデザイン班でしょ。もうみんな集まってるよ。なかやんは資材班なんだから、分担して買い出しに行くよ！」
「はいはい、じゃあね、なかやん、朱音」
恭子が去ってしまうと、文香は朱音に引っ張られながら、資材班の打ち合わせに合流した。

「じゃあ、中山さんたちは、一番近くのショッピングモールに段ボールもらって来て。早くいかないと他のクラスに先を越されちゃうかもしれないから急いでね」
班長の太田に言われて、文香たちは倉庫から台車を借りて、近所のモールまで台車をガラガラと押しながらのんびり歩く。

「ねえ、晴美」
「なに、なかやん」
「好きってどんな気持ち？」
「はあ？何恥ずいこと真顔で聞いてるのよ」
「沙代ちゃんでも、朱音でもいいけど、どんな気持ち？」
「「「・・・」」」
「なによ、3人とも黙り込んで」
「なんで、なかやんがそんなこと聞いてくるのかなって、不思議なんですけど」
「なによ、晴美、あんた橘が好きだから私に協力させようとしてるんでしょ？あんたには私に説明する義務があるよ」
「どんな屁理屈よ？」
「なによ、言えないの？」
「・・・そうだな～。私の場合は、見てるだけで心拍数が上がって、いろんなしぐさに目が行っちゃうっていう感じなんだけど」
「見てるだけでねぇ・・・」
「そんな真剣に聞かれると恥ずいじゃん。沙代ちゃんはどうなのよ

～」
「えっ！う～ん、私はなんかその人だけが特別っていうか。話しかけられるとうれしいって思うし、もっと話したい、もっと仲良くなりたい、いろんなことが知りたいって思うよ」
「なあるほどね～。で朱音は？2人とも言ったんだからあんたも白状しなさいよ」
「エエ～・・・・実はよくわかんないけど、う～ん。なんか大勢いるのに、なぜかその子だけすぐに見つけられちゃうんだよね。目が追っちゃうっていうか。それで何かと構いたくなっちゃうんだな。喧嘩してばっかだけど」
「ふむふむ、そんなもんかねえ」
「って、なかやん、あんた人にばっか聞いてないで、自分の話もしなさいよ！」
「えー、だって、私、好きな人いないもん」
「はぁ？噂の斎藤君はどうしたのよ？付き合ってるんじゃないの？」
「へ？私晴美にそんな甘い話した？そもそも、その噂ってやつも、ついこの間知ったばっかだし、ってかなんでみんな教えてくれないのよ？」
「何言ってんのよ？そんな話したらうまくいくもんもいかなくなるかもしれないでしょ？」
「そうだよね。なかやんって恥ずかしがり屋さんだからね」
「そうそう、みんなで話し合ってこの話はなかやんには秘密ねってことになったんだよ」

にこやかな3人の顔にはまったく悪意がない。本気でそう思って文香には秘密にしていてくれたんだろう。おかげで私は・・・と思いかけたが、確かにそんな噂を聞いては平静でいられなかった自分がありありと想像ができたので、素直に感謝することにした。結果はともかくとしてだ。

「はぁ、それはゴメンドーをおかけしまして・・・」
「で？なかやん、斎藤君とはどうなってるの？」
「どっどうって、どうもなってないよ！」
「あっ赤くなってる！なんかあったんだ！」
「ぎゃ～、何にもナイナイ。楽しいことは何もない！」
「そんなムキになって、よけい怪しいよ～」
「やっぱ、つきあってるんでしょ？」
「まあまあ、晴美も、朱音もそんなに責めたらなかやんも話しづらいよ。ね？・・・それで？もしかして告白された？」
「・・・沙代ちゃん、フォローになってないよ。告白もされてないから」
「でもさ、ぜったい、斎藤君はなかやんラブだよね」
「まあ、あれだけアカラサマだからね」

口々にそう言われ、文香は自分の馬鹿さ加減を骨身に沁みるほどに思い知った。
―分かってないのは、じゃなくて、分かろうとしなかったのは私だけなんだ。私のバカバカバカ・・・サイアク

「うん、やっぱりみんなもそう思うよね？実はさ、さっきそのことで、ののに軽く説教くらってたんだ。でも私、ポチ公が好きかどうかよく分かんないし。それで、自分の気持ちをよく考えてみろって、宿題出されてんだよね」
「えっそうなんだ。じゃあ、やっぱり付き合ってないんだ。まぁそうだよね。付き合ってる相手「ポチ公」呼ばわりしないよね」
「なんかやたら毒づいてたしね。なんか付き合ってるにしてはちっとも甘くないなとは思ってたんだよね」
「私なんか、てっきりなかやんってS子なんだって思ってたよ。あるいはツンデレ？」
「ごめん。みんなに心配させちゃって・・・って何気に最後の方シ

ツレーじゃなかった？オイコラ、晴美～」
「あはははは～、ごめ～ん。ちょっとしたオチャメだよう！おこんなって！」
「テメー！ヒキコロス！」
「きゃー、なかやんご乱心～」

逃げる晴美を台車をガラガラしながら追いかける。
大笑いしたら、なんだかここ数日間のモヤモヤが晴れていた。

第6話　前進あるのみ

1日目の準備作業はあらかた片付き、クラスメイトは帰って行った。教室には、長引いている優子を待つ文香と、作業がまだ終わらなかったらしい恭子だけが残る。
スケッチブックを抱えて胡坐を組んで座っている恭子と背中合わせに、文香は足を延ばして座り込む。
「ねえ、のの～」と恭子の背中にもたれながら話しかける。
「何？重い、邪魔」
「あのさ～、昼はありがと。なんかちょっと前進できたかも」
「ふ～ん」
「それでもさ～、やっぱ分からないんだよね。好きかどうか」
「ふ～ん」
「さっきさ、晴美たちにも聞いてみたわけ。好きってどんな？って。でもやっぱ分かんなくてさ～。これは好きじゃないってことかな～」
「さあねえ」
「きーてるー？のの は好きな人いる？好きってどんな？」
「あーのーねー。邪魔しないでよ。帰れなくなるじゃない！」
「ちぇ、冷たいヤツ」

大きく恭子が息をつくのが聞こえた。
「しょうがないな、このオコチャマは。あのね、恋愛なんていろんな形があるわけよ。それぞれがいろんな気持ちの集合体に恋って名づけてまとめてるの。だからはっきり言って、なかやんの気持ちが恋かどうかなんて誰にも決められないのよ」
「そんなもの？」
「少なくとも、私はそう思う。だから恋かどうか、なんてことよりアンタがどうしたいかって考えてみたら？このままポチ公とずっと仲良くしたいって思うなら、付き合えばいいし、別にこれでバイバ

イして単なる顔見知りに戻ってもいいなら、はっきり断ればいいのよ！」
「う～ん」
「どうなの？」
「バイバイはちょっとさみしいかも？」
「じゃあ、付き合えば？」
「でもなんか違和感がぬぐいきれない気がするんだよね」
「今はそうでも、付き合ってみたら変わるかもよ？」
「え～、そーかなー？」
「じゃあ、キスされてどう思った？うれしかった？嫌だった？」
「ん～、嫌、じゃなかった、と思う。・・・ああなんかポチ公とキスするってこんなカンジなんだなあって思った」
「・・・アンタ、感情の起伏薄すぎでしょ、ソレ。まあ、ともかく嫌じゃなかったなら、どっちでもいいんじゃない？」
「のの～？なにその投げやりな感じは？」
「好きかどうかは、付き合おうが付き合わなかろうが、そのうち分かるよ。後悔はするかもしれないけどね。ただし、付き合えばキスとか？それ以上の関係とか？迫られるのは必至だから覚悟しなさいよ？」
「後悔はあんまりしたくないな～。キスとかそれ以上とかは～まあどうでもいいかな～」
「・・・あんた意外に節度ないね・・・処女のくせして・・・ともかく後悔したくないなら、結論出るまであがきなさいよ」
「うん。ねえ、例えばさ、どんな後悔がありえるかなあ？後悔するとしたら、付き合ってみてやっぱ好きじゃなかったーて場合と、付き合うのやめてやっぱ好きって後から気づいちゃった場合だよね？」
「まさか、どっちのリスクが大きいかで結論変えるつもり？打算的な女だな」
「だってよく考えてみると、前者はポチ公が泣く結果、後者は私が泣く結果になるってワケじゃん？」

「ちょっと、ヒドイこと考えてるでしょ？前者だって、なかやんが泣く場合もあるでしょ？」
「なんで？」
「たとえば・・・ポチ公と付き合う、でも恋愛感情じゃないからアンタは他に好きな男ができるワケ。するとポチ公との関係は清算しなきゃってなる。で、その頃には今以上に愛着の湧いてるであろうポチ公を泣く泣く里子に出すってわけだ。ほら罪悪感湧いて来た？苦しいでしょこれも」
「・・・ナニソレ、モーソー？」
「損得勘定じゃなくて、もっと自分がどうしたいのかを考えなってコト！」
「・・・」
「ほら、もうわかったら、邪魔すんな！重い！」

恭子に背中を押し返されて、文香はしぶしぶ立ち上がる。
「アンタそのままポチ公のところ行ってきな。そんで、分かりませんでしたーて言ってきな。アンタの場合は経験不足。一度ぶつかってきなよ。このままじゃ埒明かないでしょ？」
「え～」と渋る文香をいつになく怖い顔で「ウザい。出て行け」と恭子は追い出した。

追い出された文香はいやいやながらも、覚悟をきめた。それでもとぼとぼと暗い階段を上っていると、バタバタッと急に大きな足音が聞こえた。
「ん？」と顔を上げると同時に、駆け降りてきた誰かと右肩が接触した。
「んが！」強い衝撃を受けて文香はのけ反る。
―ぎゃあ、落ちる落ちる落っこちる！死ぬー！
バランスを崩して倒れそうになった文香は、腕をアワアワと振り回し、指先に触ったものを引っ掴んだ。

「うわっ」
「うぎゃ～！」

少しの浮遊感と衝撃の後、文香は固くつむっていた目を開く。
「アイタタタ」と肩をさすりながら起き上がると、どうやらぶつかって来た誰かを思いっきり下敷きにしたらしい。
大した怪我をしなかったことを確認しながら、立ち上がり、自分の下にいた、うつぶせに倒れている人に声をかける。
「あの～、大丈夫ですか？」
もぞもぞと動き出したことにホッとしながら、近寄ってしゃがみ込み、肩を叩きながらもう一度声をかける。
「大丈夫ですか？意識はありますか？えーと、ここがどこかわかりますか？自分の名前を言えますか？」
救急処置の手順を思い返しながら、とりあえず意識確認をしてみた。
「えーと、ここは高校の階段で、名前は橘裕也・・・」
「意識は大丈夫そうね。じゃあ、どこか痛いところはありませんか？足は大丈夫ですか？」
「なんとか無事。痛いけど」
「う～ん、とりあえず保健室行きますか。立てますか？」
「ああ、ありがとう。なんとか立てそうだ。ってオマエ中山か？」
「ん？げっ、若っング、じゃなくて橘君！！！」
「・・・なんでお前が今頃びっくりするんだよ？俺はさっき名乗ってるだろうが」
「いや～、ちょっと慌てて聞き逃した。えへっ」
「今のが慌ててたのか？俺には至極落ち着いているように見えたけど・・・」
「で？怪我は？保健室行く？」
「いや。大丈夫だ。打ち身くらいだろう。それほど上から落ちたわけじゃないし。・・・悪かったなぶつかって」

「いえいえ、こちらこそ下敷きにしちゃってごめんね。・・・で、何をそう慌ててたの？」
「あっそうだ！電車の時間！・・・いや、いい、次の電車にする」
「あらら、まあ飛び込み乗車は危険だし？そんな急がなくてもまだ電車はあるんでしょ？」
「まあな。ただ今の逃すと乗り継ぎが面倒なんだ・・・」
「そうか、それはそれはご愁傷様です」
「ご丁寧に傷み入ります」

―あれ？なんかまた同じようなパターンになっちゃった？
顔を上げると、橘もやはり同じことを思ったのだろう、目が合い、一緒に噴き出す。

「あ～、もう暗いんだから電気ぐらい点けないとね。あやうく魂ぬけかけたよ」
そう笑って、文香は立ち上がって電気を点けた。急に明るくなったため目をしばたかせて、やはり立ち上がってきた橘を見る。

「ほんとに大丈夫？あっごめん。背中に思いっきり私の足跡が付いてる」
「え？」
「ちょっと背中貸して？」
ぱたぱたとはたいてやると、だいぶ足跡は薄くなったが、うっすら黒くなっている。
「まだ、ちょっと汚れてるけど、後は洗濯してもらってね」
「ああ、了解」

そんなやり取りをしてから、文香が階段を上り始めると、橘も教室に戻るのだろう、一緒に上り始めた。
「橘君も、慌ててるからって階段を駆け下りちゃだめだよ」

「はは、悪い悪い。でも中山も前見てなかっただろ」
「ううっ、そうだけど、今回のは断然、橘君に責任があると思うな」
「・・・だな。スマン」
「あはは。ま、お互い気をつけようね」
「あっ！ふみちゃん！」
「うん？」

足元を見ながら階段を上っていた文香は、突然違う方向から聞こえてきた声に顔を上げた。

―あ、ポチ公

「えっと、斎藤君。なんか久しぶりだね」
「ああ？誰かさんが避けてたんじゃなかったっけ？」
「うっ」

心当たりがめちゃくちゃあった文香は眼をそらす。斎藤は無表情で文香と橘の様子を見つめる。
微妙な雰囲気を感じたのか、橘が「じゃあ、中山。俺、先行くわ」と声をかけて文香を置き去りにする。

―橘！若殿なら助けろ！弱きを助ける武士道精神はどうした？！

心の中で助けを求めたが、無情にもその背中は遠ざかっていく。すぐに見えなくなった背中のあった場所を睨みながら、「若殿」の身分は旗本じゃなくて御家人なんだから、と格下げを決定した。

「それで、3階に何か用事？」
「えっ・・・え～と優ちゃんの様子をうかがいに・・・」
「ん？木下なら今日は帰ったぞ」

「えっ、嘘！・・・じゃあ私も帰る・・・」
「じゃあ、俺も帰ろ・・・」

文香は教室に戻りかけたが、恭子の顔を思い出して考え直す。

「あの、斎藤君。話があるんだけど」
「ん～、何？」
「ちょっと、こっち来て」

階段を下りて、昇降口まで行き、誰もいないことを確認してから立ち止まり、斎藤を振り返る。

「あのさ、私ちょっと考えたんだけど」
「ん、何？」
「あ～、その前に聞いていい？」
「ん？」
「何であんなことしたの？」
「あんなこと？」
「分かってるでしょ？木曜日の放課後、斎藤君が私にしたことだよ」
「ああ、なんでキスしたか？」
「・・・うん」
「そりゃ、したかったからデショ」
「だから、なんでしたかったのか聞いてるの！」
「そりゃ、ふみちゃんが好きだからデショ」

その軽い口調に文香は斎藤の顔を見る。
しかし口調とは裏腹に斎藤の顔は笑っていない。

「・・・そう。でも、私の気持ちを無視してそういうことをしないで欲しい」

「ふみちゃんの気持ち？」
「私は・・・斎藤君のこと好きなのかどうか分からない。曖昧な気持ちしかない」
「うん」
「だから、斎藤君と付き合わないし、キスもしない」
「ん」
「でも斎藤君の気持ちに気づかないふりして無視してたのは悪いと思ってマス。斎藤君と一緒にいると楽しかったから、ズルイことした。ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げ、頭を上げると同時に肩を掴まれて引き寄せられる。
柑橘系の香りが鼻をつき、直後斎藤の固い胸に肩を抱かれて押し付けられる。
―・・・ポチ公、やっぱ体温高い・・・
それほど小さいわけでもない標準サイズの文香がすっぽりと納まる、意外に筋肉質な胸にドギマギしながらも、急いで離れようと体をよじる。

「・・・動くな・・・他には何もしねぇから」

そんな斎藤の勝手な言葉に、それでも文香は力を抜いた。

「ふみちゃんがいいって言うまで何もしない。だから、これまで通りに付き合って？」
「そんなの無理・・・」
「なんで？ふみちゃんも楽しかったって言ったじゃん？」
「でも、斎藤君の気持ちに気づいちゃったら、それまで通り楽しくなんて、無理」
「でも、ふみちゃんも俺のこと好きかもよ？分かんないんだろ？」

「好きじゃない可能性もあるんだけど・・・分かるまで待ってもらうなんて、できないよ」
「でも、まだ待てる。待ちたい」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・じゃあ、文化祭が終わるまで待って？はっきり返事をするから。それまでもう少し考えてみる」
「でも文化祭までじゃ、放課後一緒にいれないじゃん」
「そうだけど、もう避けないから。そうしたいの。ずるずる斎藤君の気持ちを無視して楽しく過ごすことなんてこと、もうしたくないよ」
「・・・そっか。わかった」
「ごめんね」

言いながら文香が斎藤の胸に額を軽くぶつけると、斎藤は文香の肩を押して、腕の中から解放する。

「はあ～。じゃあ俺、もう帰るわ。あっそうだ、木下まだ教室にいるよ。さっきのは嘘」
「え？」
「ちょっとふみちゃんと話したかったからさ。なんか橘と楽しそーにおしゃべりしてるし？」
「楽しそーって、そんなんじゃないよ！」
「どーであっても、ムカつく・・・ぐぁ～かっこ悪いこと言っちったよ・・・。じゃ、ホント帰るわ。バイバイ」
「バイバイ、また明日ね」

さて教室に戻るか、と首をパキパキ回しながら階段に向かうと、階段に恭子が座っていた。

「ぉわっと・・・聞いてたんだ？」
「まあね。帰ろうと思ったら、進行方向が取り込み中だったから、待ってたの」
「そっか、悪い」
「ううん、まあ、お疲れサン」
「うん、疲れた・・・」
「なかやん、アンタにしては、よく頑張ったじゃん？」
「ははは、そっかな」
「あくまでも、アンタにしては、だけどね」
「ふん」
「じゃあ、じっくり考えなよ。お先！」
「は～い、またね～」

立ち上がる恭子に手を貸しながら、軽く挨拶を交わして別れる。

―ののがいてくれてよかった、いなかったら自己嫌悪で溺れてたな・・・

そのまま勢いよく3階まで階段を駆け上がった。

第7話　放課後クラブ

その後は、特に意識をしていたわけではなかったが、斎藤と会うこともなく、文香は文化祭の準備に追われた。そして、途中で段ボールが足りなくなり駆けずりまわったり、ペンキをこぼしたり、とそれなりにハプニングはあったが、無事文化祭の日を迎えた。

『ジャングル探検ツアー』
教室の入り口に立て看板を掛け、皆で感慨深げに眺める。

「なんとか間に合ったね～」
「のの、お疲れ～。最後の辺は、目が血走ってたよね～」
「なかやんがペンキこぼしたせいだよね～」
「沙代ちゃん、それはもう忘却の彼方に置いてこようよ・・・」
「都合のいいことだけ、忘れようとすんな、コラ」
「それも才能のひとつよ」
「・・・・」
「さ～て、子供たちはいつくるのかなぁ？」
「子供にウケるといいね」
「でも～ののが描いた動物、なんかすごいよね？」
「ほんと、写真みたい。・・・子供泣くかもよ？」
「確かに。よく見ると草食動物の目が死んでて怖いんだよね」
「他の子の描いた動物がかわいいだけに、なんかすごい不思議な世界だよね」
「そうそう、しかも背景は思いっきりうちらが描いたから、落書きみたいな花が能天気に咲いてて」
「そして、その横に恐ろしい顔をしたサイがこっちを死んだような目で見てんだよね」
「ある意味ホラーだよ」

「・・・ねぇ、さっきから褒められてる気がしないのは気のせいかしら？」
「そんなことないよ！芸術って凡人にはなかなか伝わりにくいもんだなって話よ？」
「せっかく可愛く描いてやったのに・・・」

恭子の発言につなぐ言葉を思いつかなかった４人は、組長が集合をかけたのをこれ幸いと教室へ戻る。

「じゃあ、この分担表の通り、各自時間どおりにこの場所に来てくれよ。受付に２人とガイド役が５人の計７人で１時間ずつ、時間厳守でよろしく。じゃあ解散」

組長のその声を合図に、ぞろぞろと教室を出て、思い思いの場所へ散っていく。

「これからどうする？」
「う～ん、とりあえず一通り各ブースを冷やかすかな」
「舞台はなんか見る？」
「吹奏楽と、落語と、演劇は外せないな」
「なかやん、落語って渋くない？」
「そう？素人のカラオケ聞くより有意義だよ。たぶん。落語という、高校生とはかけ離れたものを、わざわざ、チョイスしてくるあたりに、ほとばしる情熱を感じるじゃん。これは一見の価値あり、と見た」
「合唱と軽音部のライブは？」
「う～ん。行ってもいいけど、下手だったら途中で消えるからね」
「晴美を連行して、１組にも行かなきゃだったよね？」
「のの・・・よく覚えてたね。（余計なことを）」
「そうだよ！それが一番重要課題だからね。逃げんなよ」

「でもさ～。１組って何やるの？うちのクラスみたいに分担制なら橘君いないかもよ？」
「ふっふっふ、そう思って、ジャーン！１組の分担表ゲットしてきました！」
「すごーい。晴美、どうやって手に入れたの？」
「うちの分担表をコピーするふりして、印刷室で１組の組長が来るまで張ってたのよ！」
「晴美！！どうりで仕事中にいつもいないと思ったら！」
「うわっこえ～。ストーカー一歩手前だよ。こいつ」
「ふん、なんとでも言ってよ。おかげで効率的に出会えるってもんでしょ？だいたいなかやんのことだから、１～２回行ってみていなかったらすぐ諦めて紹介してくれなさそうなんだもん」
「うん、そのつもりだったけど。でもその執念にはかなりビビった。で、何時なの？橘君の担当」
「えっと、１１時から１２時だって」
「え～１１時１５分から落語なんだけど！」
「じゃあ、１１時に行ってなかやんだけダッシュで会場に行けば間に合うって」
「むう、身勝手な！えっと、落語会場は・・・視聴覚室か。いい席取れなかったらどうしてくれんのよ」
「そんな渋いの見る人はぜったいマイノリティだよ、なかやん・・・」
女３人寄ればかしましい、というが５人も女子高生が集まればかしましいどころの騒ぎじゃない。騒音公害で訴えられそうな騒ぎだ。だが、それも周囲の喧騒に紛れて、溶け込んでいる。
「じゃあ、一通り回ったら、それぞれ好きな所に行って、１１時チョイ前に教室で待ち合わせね？」
「えっみんなで１組行くの？」

「うん、柱の陰から見守ってるから」
「ヒューマの姉か？おまえは！」
「アキコと呼んで？」
「野次馬根性・・・」
「まあ、いいじゃん。その方が心強いでしょ？」
「ビミョー」

どこまで本気なのか分からないようなやり取りを続けながら、文香たちはめったに足を踏み入れない上級生のフロアを適当に冷やかしながら歩く。たいして面白いものも見つからず、結局5人で古い映画を上映している体育館で時間をつぶし、１１時に近くなったので教室へ引き上げる。
とりあえず自分たちの教室に引き上げると、そこで意外な盛況に出くわす。

「なんか他のブースに比べて、やったら混んでない？」
「ほんとだ」
「でもあんま子供はいないね」

その様子に訝しく思いながらも、手持無沙汰な様子で入口で立っているクラスメイトに話しかける。

「どう？いそがしそうだね？」
「う～ん、そうでもないよ。なんか子供じゃなくて、カップルが多くってさ。ツアーガイドがいらないから、勝手に見てもらってる感じで、ガイド役は暇だよ」
「カップルで？肝試し感覚なのかな？」
「・・・朱音、それは私への嫌味なの？ケンカ売ってたりする？」
「い、いいえ、そういうわけでなく・・・そ、それで？オコチャマ達はどうしたの？」

「園児は最初の頃に幼稚園の先生の引率で大量にやってきて、ぞろぞろと見てもらって、それでおしまいだった」
「ふうん、まあ、そんなもんかもね」
「それにしても、カップルはよっぽど行く場所がないと見えるね」
「まあ、暗闇で二人きりなんて、最高のシチュエーションだもんね。のぞき穴でも作っておけば楽しかったかな」
「晴美、あんたの品性をものすっごく疑うよ。あたしゃ・・・」
「なによ？みんなのその眼は？そんなこと言って、実際にのぞき穴があったらみんなも見るに決まってるのに！」
「それを口にしない品性くらいは持ち合わせようよ・・・」

文香たちのとりとめのない会話に、クラスメイトが離れていこうとする。それを潮時と、口々にクラスメイトに挨拶して、今度は3階へ向かう。

「で？1組は何してんの？」
「風船&魚の釣り堀」
「はぁ、個人的には全く興味がないな」
「いいの！そこが目的じゃないんだから」

晴美に引きずられるように連行されていく文香と、少し距離を空けて残りの3人もぞろぞろ付いてくる。
ほんとに覗き見する気のようだ。どうやってさりげなく晴美を紹介しようか、ぐるぐる考えているうちに、あっという間に1組へ到着した。
入口から覗くと、ここは園児たちに人気のようで、子供たちが楽しそうに釣りに興じている。
しかし、肝心の橘の姿はない。

「いないね」

「うん」
「もどろっか」
「ええ？ちょっと遅れてるだけでしょ？少しは粘ってよ！」
「・・・じゃあ5分だけだよ」
「・・・けち」

結局5分待っても橘は現れず、ぶーぶー言っている晴美を皆に押し付け、一人視聴覚室へ向かった。

「・・・だれだよ。マイノリティっつったの・・・」

視聴覚室は意外に大盛況で、満席だった。それも、お年寄りで。
―老人クラブのお年寄りが山盛り招待されてるの忘れてた・・・
文香は、はぁとため息を吐きながら諦めて後の壁際で立ち見することにした。
スピーカーから、出囃子が聞こえてきて、どうやら落語が始まるようだ。
ふと誰かが入って来る気配を感じて、入口を見ると、なんと橘だ。
さっきまで待っていた人物と意外な場所で遭遇したことに驚きつつも、こちらに気づき近づいてくる橘に軽く手をあげて合図する。

「よお」
「やあ、こんなところで会うとは意外。落語好き？」
「いや。ツレが、出るから見に来いって言うから、仕方なく」
「そう」
「そっちは？」
「自由意思。面白そうじゃん」
「そうか？」
「私にはね」
「ふうん」

小さな声で囁き合って、すでに始まっている落語の方に意識を向ける。
文香は橘の意識が落語に向かったことを確かめると、携帯を取り出しメールを打つ。

《橘ハッケン。視聴覚室に来い》

短い文章を打ち、晴美へ送る。ちらっと橘の様子をもう一度窺うと、割と真剣に落語を聞いているようだ。
文香も橘に倣って、落語へと意識を集中させた。

・・・

最初の演目が終わる頃、晴美は視聴覚室にやってきた。
橘と文香を見つけると、橘に会釈しながら文香の横に来る。
文香が気を使って、橘との間に入れてやろうとするのに、晴美は文香の陰に隠れるように、橘とは反対側に陣取った。

「何してんのよ」
「だって、いきなり隣は近すぎるでしょ。息止まって死ぬ」
「あほか。何しに来たのよ？あんたは」

などと、こそこそ話していると、橘がこちらを見ている。
それに気づき、文香は晴美を自分の陰から引っ張り出して、やはり声をひそめて話しかける。

「これ、私の友達の晴美。瀬下晴美」
「はあ」
「で、こちらが橘君。1組で弓道部」
「た、橘君。よ、よろしく、です」
「ああ、よろしく。・・・中山、なんだその紹介は？」
「簡潔でしょ？私の知りうる情報のすべてだよ」
「なるほど」

晴美は落語の最中何度か話しかけようとしては、深く息を吸い込み、いくのかと思うと息を吐き出し、というのを何度か繰り返した。
隣で緊張し続ける晴美の様子に気を取られ、文香は落語の内容なんてまったく理解できなかった。
落語が終わると、橘は落研の友人に声を掛けに行ってしまい、結局たいした会話もせずに終わってしまった。

「あんなに、晴美が内気だとは知らなかったよ。せっかく紹介した

んだから、もっと楽しいトークでもかますのかと思ったのに。落語も気が散ってあんまり聞いてられなかったし。なんか損した気分」
「うん、意外だよね。いつもの晴美なら、男子とも平気で話せるのに」
「なかやん、朱音、もうその話は・・・晴美、どんまい！次、次がんばろう！」

うなだれる晴美に、沙代子が慌ててとりなそうとする。
少しかわいそうかなとは思うが、自分はやることはやったぞ、と少し肩の荷が下りたような気がして、文香はホッとした。
そんな文香を晴美がジトッと見てくる。

「なによ？その眼は」
「なかやん、橘君とすっごく仲良さそうだった・・・」
「はぁ？アンタ、この恩人サマにそんな言いがかりかけようっての？」
「だって、自然に会話してたもん」
「そりゃするでしょ。人間だもの。勝手に貝になっちゃったアンタがおかしいっつうの」
「・・・ヒドイ」
「ひどくない！もう、あとは自分でがんばりなよ？ふぅ～、食った食った～満腹満腹～」
「ぶっ、なかやん、おっさんみたい～」

無理やり話を終わらせて、弁当箱を片付ける文香を、まだ晴美は恨めしそうに見ていたが、それ以上は何も言ってこなかった。

・・・

しばらく晴美はご機嫌ナナメだったが、その後は滞りなく文化祭を楽しみ、残すはファイヤーストームだけとなった。
グランドの中央にはすでに丸太が組まれ、それを目印に生徒たちが集まっている。
文香はその輪に加わりたいとは思えず、教室の窓から、その様子を見ていた。

「サボり魔」
「・・・のの、アンタも？」
「私はキミを探しに来たの」
「ほんとに～？なら、悪いけど私は参加しないから、ののは行ってきなよ」
「なんで、参加しないのよ？」
「う～ん、なんでだろう？あんま、そういう気分じゃないというか。上から見た方がきれいかろうと思って。熱いのも煙いのも臭いのもゴメンだし」
「ほんとに、アンタ、可愛くない。強情だよね」
「いいじゃん、いいじゃん。私ひとり抜けようと、滞りなく進むんだから」
「・・・しょうがないヤツ」
「あれ、ののもサボるの？」
「今さら混ざるのも目立つでしょ？」

恭子も窓際の机に腰掛け、外を眺める。
生徒会長が何やら演説を始め、中央の井桁に組んだ丸太に火が点けられた。まだそれほど暗くないので、煙ばかりがよく見える。
環境問題が声高に叫ばれているこのご時世にいかがなものかとは思うが、日が暮れて暗くなってくると、火の粉が舞い上がる様子はやはり幻想的だ。

「キレーだね」
「そうね」
「これで、文化祭も終わりだね」
「そうね」
「・・・今日美術部の展示、見たよ」
「ああ、見たんだ」
「うん」
「どうだった？」
「みんな上手だね」
「そう？」
「ののが描いた絵は・・・よく分かんないけど、見ててドキッとしたというか、ギクッとしたというか。なんか世界から置いてきぼりにされる焦りみたいなものを感じたっていうか・・・」
「そう」
「今の明るくてキレーなグランドがなんか現実とは思えないような気がするのと同じ。同じ次元にいるはずなのに、薄い膜で隔離されているような。あっちとこっちで時間の進み方がずれてるような・・・」
「何それ？イミフメー」
「うまく言えないけど、そんな気がしたの」
「ふ～ん。ありがと」
「？なんのありがと？」
「なんだろ？私の絵を見てくれたことへのありがと、かな？」
「なるほど。また見せてね」
「うん、いいよ」

その後も窓の外を見ながらぽつりぽつりと会話を交わしていると、グランドから大きな拍手が聞こえた。
どうやら閉会のあいさつがあったようだ。

「さてと」
「帰る？」
「ううん・・・ポチ公捕まえて引導渡してくる」
「そっか、じゃ私は帰るけど、大丈夫？」
「うん、大丈夫。ありがと」
「じゃ、またね。バイバイ」
「うん、バイバイ」

恭子が帰ってしまうと、ファイヤーストームに参加していた生徒たちが、荷物を取りにがやがやと教室に戻ってくる。
斎藤が通るかもと思い、廊下へ出て、階段を上っていく人の波を見送ったが、そこに斎藤の姿は見つけられなかった。

―もう帰っちゃったのかな。ポチ公
さらに階段を下りる波まで見送ってしまうと、校舎はほとんど無人になったようだ。しかたなく、文香も帰ろうと教室へカバンを取りに行く。
今朝優子は、文化祭の後、クラスの打ち上げがあると言っていた。
今日は一人で帰るしかない。

昇降口で靴に履きかえ、人気のなくなった校庭を歩く。と、校門を出たところで、文香を引き留める声がした。

「ふみちゃん」
「あっ、斎藤君。まだいたんだ」
「つか待ってた。探してるかもって」
「うん、探してた。でもいないからクラスの打ち上げに行っちゃったのかと思ったよ」
「・・・ふみちゃん、ファイヤーストーム、いた？」
「へへ、サボり。教室から見てた」

「なんだ。なら教室行けばよかった」
「・・・斎藤君、電車だよね。駅まで一緒に帰ろう？ってクラスの打ち上げはいいの？」
「あー、どうせ打ち上げも駅前のカラオケ屋だから。つか、もとから行く気ねーし」
「そっか」
「ふみちゃんのクラスはやんねーの？」
「うちは明日。片付けが全部終わってから、教室でやるの」
「ふ～ん」
「あのさ。斎藤君。例の返事しちゃって良い？」
「ああ・・・いや、やっぱ後で、駅で別れる時がいい」
「・・・うん」
「なあ、手、繋いでもいい？」
「・・・」

文香は周囲を見回し、誰もいないことを確認するが、それでも逡巡する。
だが斎藤は返事を待たず、文香の手をギュッと握ってきた。
文香は引っ張られるように、斎藤の少し後ろを歩く。

「一緒に帰ってみたかった」
「そう」
「あのさ、俺、ふみちゃんが好きだ。最初、教室で見かけて木下たちと楽しそうに笑ってるのを見て、かわいいって思った。でも俺が話しかけても笑ってくれなくて、はじめのうちはそれが悔しくて話しかけてたんだ。でもそのうち俺にも笑ってくれるようになったじゃん？それがなんか嬉しくって。最初の笑顔にやられちゃってたんだって気づいた。気づいてからは、ふみちゃんに近づきたいって、毎日放課後会いに行った。俺ってケナゲ・・・友達からでもなんでも、俺と付き合えよ。絶対楽しいって」

そこまで、一気に言うと、斎藤は歩みを止め振り返る。困った顔で見上げると、ちょっと悲しそうに笑って、また文香の手を引いて歩き出す。

「・・・ごめん。あの、そんな風に好きになってくれて、すごくうれしい。私でも斎藤君みたいな、カッコイイ男の子に好きになってもらえるんだって、ちょっと自信がついちゃうよ。ありがとう。でもね。考えたけど、やっぱ付き合えない。ごめんなさい」

斎藤は歩きながら、ちらっと文香を振り返り、「シマッタ」と苦笑する。

「駅まで待ってって言ったのに。もう返事言わせちゃったよ。せっかく初めて手を繋いで帰ってるってのに、俺ってバカ?」

「・・・ゴメンナサイ」

「もう、謝んなくていいよ。今まで付き合ってくれてありがと。すごく楽しかった」

「こちらこそ、ありがとう。私も楽しかったよ」

「もう、これからは、放課後、行かないから」

「うん」

「声もかけない。でも挨拶くらいはしても、いいよな」

「うん。挨拶くらいしたい」

それから駅までは2人とも無言で歩いた。

前を歩く斎藤の表情は分からなかったが、ギュッと握られたままの手からはずっと熱が伝わってきた。

「あ〜あ、もう着いちゃった。今日くらいはもっと駅が遠ければ良かったよ」

「・・・」
「じゃあ、これで、放課後クラブは解散」
斎藤は文香の顔を見て、ニカッと笑い、繋いでいた手を最後に強く握ってから、離した。
急速に熱を失っていく手に寂しさを感じつつ、文香も少し笑い返す。

「じゃあな」
「うん」
「気をつけて帰れよ」
「ありがと」

手を振って斎藤と別れる。もうこれで、斎藤とはバイバイだ。
―ポチ公、バイバイ。ポチ公のいない、放課後はきっと、さびしいよね・・・
文香は泣きたいような気持ちを押し殺し、ただただ家を目指していつもよりも早足で家路をたどった。

・・・

さて、と宿題のプリントを取り出して広げる。
取りかかろうとして、ふと思いつき、紙飛行機を折ってみる。
白い紙飛行機をもてあそびながらポチ公を思い出す。
「私の耳は貝の殻　海の響きを懐かしむ」
ふいに有名な詩が浮かび、この気持ちは幼い頃の楽しかった日を懐かしむような気持ちに近い、と思いいたる。
―あ～あ、これじゃ浸りすぎでしょ。らしくないなぁ・・・こんなロマンチックな詩、趣味じゃないのに！
今は寂しさの方が強いけど、いつか懐かしく思い出す時がやってくるんだろうと漠然と考える。

ようやく捕まえた前向きな気持ちで、空を振り仰げば、どこまでも青く高い空が広がっている。思わず紙飛行機を飛ばしたくなる手に苦笑いがもれる。
「さてと、やるか」
文香は紙飛行機をほどき、両手でしわをのばして広げ、ギュッとシャープペンシルを握りしめた。

・・・

第7話　放課後クラブ（後書き）

拙文に最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。
生まれて初めて書く小説を、勢いで一気に書いてしまったため、矛盾点が随所に見受けられたのではないでしょうか。もう少しクールダウンしてから推敲すべきだったのかな、と少々反省しています。
（後々、改稿する可能性大です）

でも文香の放課後クラブは、シリーズとして続きを書きたいと思っています。
ポチ公と離れてからの文香の行動に、もしご興味があれば、少しだけお待ちください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9832e/

放課後クラブ―初恋プロローグ―

2010年10月21日13時44分発行